

A Study to Delimitate the Natural Language Semantics in the Cognitive System by Analyzing the Meaning Variation of Expressions in Language Uses

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-01-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Takeuchi, Yoshiharu メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24517/00049863 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



KAKEN

1992

26

言語表現の意味の揺れの記述に
基づく言語学意味論の
認知科学的位置づけのための研究

(課題番号 02610225)

平成4年度文部省科学研究費補助金(一般研究(C))
研究成果報告書

1993年3月
(平成5年3月)

研究代表者 竹内義晴
(金沢大学文学部助教授)

EN

2

3

KAKEN
1992
26

平成4年度文部省科学研究費補助金（一般研究(C)）

研究成果報告書

課題番号：02610225

研究課題：言語表現の意味の揺れの記述に基づく言語学意味論の
認知科学的位置づけのための研究

研究組織

研究代表者：竹内義晴（金沢大学文学部助教授）

| | | |
|-------|-------|---------|
| 研究経費： | 平成2年度 | 300千円 |
| | 平成3年度 | 400千円 |
| | 平成4年度 | 400千円 |
| | 計 | 1,100千円 |



8000-24317-2

金沢大学附属図書館

研究発表

学会誌等

- [1] 竹内義晴：自然言語の意味論の基本問題：世界についての知識と自然言語固有の意味との関係について。言語科学 26号（1991年 3月）
- [2] 竹内義晴：テキスト・データベースから採取した言語表現資料に基づいてリレーショナル・データベースソフトウェアを利用して言語記述作業を行うためのマニュアル的ノート。言語科学 27号（1992年 3月）
- [3] 竹内義晴：意味解釈に対する統語関係の未決定性と、意味理解・知識処理における言語表現の意味関係の役割について — テキスト・データベースによるドイツ語の形容詞「empfindlich」の記述から。ドイツ文学論集25号（1992年10月）
- [4] 竹内義晴：表現対象（モデル）の意味論からことばの意味論へ — 言語と知識の平行理論に向けて。西日本ドイツ文学 4号（1992年11月）
- [5] 竹内義晴：自然言語における言語固有の意味の追求 — テキスト・データベースによって検索したドイツ語の形容詞「empfindlich」の使用例についての意味の揺れの記述から。金沢大学文学部紀要文学科篇（1993年3月）
- [6] 竹内義晴：言語表現の意味理解と認知システム — ドイツ語の形容詞「schwer」と「leicht」の解釈における推論、類推、比喩・見立て・イメージの拡がり、認知型の働き。発表予定

口頭発表

- [1] 竹内義晴：自然言語における言語固有の意味の追求 — テキスト・データベースによって検索したドイツ語の形容詞「empfindlich」の使用例についての意味の揺れの記述から。日本独文学会1991年秋季研究発表会（1991年10月）
- [2] 竹内義晴：意味解釈に対する統語関係の未決定性と、意味理解・知識処理における言語表現の意味関係の役割について — テキスト・データベースによるドイツ語の形容詞「empfindlich」の記述から。日本独文学会中国・四国支部研究発表会（1991年11月）
- [3] 竹内義晴：言語表現の意味理解と認知システム — ドイツ語の形容詞「schwer」と「leicht」の解釈における推論、類推、比喩・見立て・イメージの拡がり、認知型の働き。日本独文学会西日本支部研究発表会（1992年11月）

目次

| | |
|---|----|
| 1. 予備的考察 | 1 |
| 1.1. 人間存在と言語コミュニケーション・意味 | 1 |
| 1.2. 言語固有の意味と人間の認知システム | 2 |
| 1.3. 言語固有の意味をめぐって | 4 |
| 1.3.1. 言語固有の意味へのアプローチ | 4 |
| 1.3.2. 言語システムと認知システムの平行関係 | 7 |
| 1.3.3. 言語システムと認知システムのインターアクションの結果と しての意味の揺れ | 8 |
| 1.3.4. 言語固有の意味領域の確定のために | 10 |
| 2. 方法 | 11 |
| 2.1. 経験的データの選択について | 11 |
| 2.2. テキスト・データベースを用いた資料の収集とリレーショナル・デ ータベースソフトウェアを用いた資料の分析 | 12 |
| 2.3. 方法の経験性をめぐって | 14 |
| 3. 分析と考察 | 15 |
| 3.1. 分析と考察 I: 「empfindlich」 | 16 |
| 3.1.1. 使用したテキスト・データベース | 16 |
| 3.1.2. 分析 I | 17 |
| 3.1.2.1. 言語表現「empfindlich」の抽象的な意味構造 | 17 |
| 3.1.2.2. 言語表現「empfindlich」の意味の拡がり | 19 |
| 3.1.3. 考察 I | 23 |
| 3.1.3.1. 考察 I-a: 意味の拡がりと知識システム | 23 |
| 3.1.3.2. 考察 I-b: 意味に対する統語関係の未決定性と認知シス テム | 27 |
| 3.1.3.2.1. 意味に対する統語関係の未決定性 | 27 |
| 3.1.3.2.2. 意味関係と統語主部の指示対象 | 29 |
| 3.1.3.2.3. 知識プロセッシング | 30 |
| 3.1.3.2.3.1. 認知システムの働きによる知識処理 | 30 |
| 3.1.3.2.3.2. 知識のネットワーク | 31 |
| 3.1.3.2.3.3. 知識処理における言語表現の「方向づけと 制約」の役割 | 33 |
| 3.2. 分析と考察 II: 「schwer」と「leicht」 | 35 |
| 3.2.1. 使用したテキスト・データベース | 36 |
| 3.2.2. 分析 II | 36 |
| 3.2.3. 考察 II: 言語固有の意味（意味の核心）から言語使用上の 意味の派生について | 37 |
| 3.2.3.1. 考察 II-a: 概念的認識構造に依存した意味の読み取り （推論・類推による派生） | 37 |
| 3.2.3.1.1. 推論による意味の読み取り | 37 |
| 3.2.3.1.2. 類推による意味の読み取り | 38 |

| | | | |
|------------|-------------------------------|-------|----|
| 3.2.3.1.3. | 意味導出の複合による読み取り | ----- | 41 |
| 3.2.3.1.4. | 意味の投射・引き継ぎ | ----- | 42 |
| 3.2.3.2. | 考察 II-b: 概念的認識構造に依存しない意味の読み取り | --- | 42 |
| 3.2.3.2.1. | 比喩・見立て・イメージによる意味の読み取り | ----- | 43 |
| 3.2.3.2.2. | イメージの拡がりによる意味の読み取り | ----- | 44 |
| 4. | 結論と今後の展望 | ----- | 45 |
| 4.1. | 研究成果のまとめ | ----- | 45 |
| 4.2. | 解き明かされないもの | ----- | 46 |
| 4.2.1. | 意味理解の監督者としての認知システム上の私 | ----- | 46 |
| 4.2.2. | プロセスの競合 | ----- | 47 |
| 4.2.3. | 認知型と言語の基本問題 | ----- | 47 |
| 4.3. | 今後の展望 | ----- | 48 |
| 文献 | | ----- | 50 |

1. 予備的考察

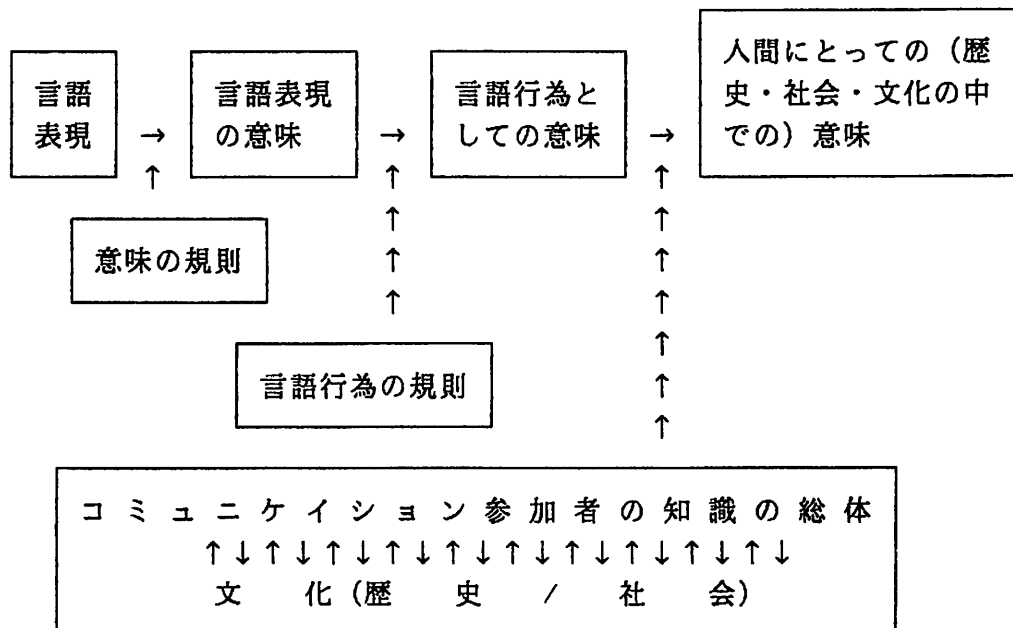
1.1. 人間存在と言語コミュニケーション・意味

長い歴史の流れを通じて私たち人間は言語を用いたコミュニケーションを行ってきた。生産（採取、耕作、加工、流通、建築・・・）、破壊（戦争、抑圧、自然開発、消費、汚染・・・）、文化（人間関係、心、教育、科学、宗教、伝達、娯楽、余暇、芸術、政治・・・）等、人間の活動を複合的に構成するどの側面から考察を加えてみても、言語コミュニケーションの助けなしには、私たちの歴史は（本当の意味で豊かかどうかには疑問があるが）これだけ複雑な内容を持ちえなかった。現代の「ハイテク」産業社会を支える私たち人間の知識は、提案、実践、反省、記録・討論・革新・伝達などの複雑なサイクルの根気強い積み重ねにより、今日の質・量を得るに至った。複雑な生産工程を構成・維持・更新する努力が続けられ、その生産物はまた、人間の共同作業により、新たな諸活動のサイクルに投入される。

これらの営為によって、人間は生産や文化の活動を継続してきただけではない。ペルシャ湾岸戦争が示した大量破壊に言及するまでもなく、人間は、みごとにまでの効率よさで破壊を遂行する。これらの、人間を象徴するほとんどのことがらの成立が、言語コミュニケーションの存在なしには、ありえないことなのである。

言語コミュニケーションの成立を可能にしている最も大きな要因が人間の知性であることには間違いはない。他方、ことばが働く、ということが、あたりまえのことではあるが、言語コミュニケーションの成立を可能にしている。ことばが働かなければ、「言語コミュニケーション」という概念は自己矛盾を起こしてしまう。では、ことばが働く、

1)



(竹内 1992a、37ページ)

ということの何が、言語コミュニケーションの成立を可能にしているのかということ、その重要なものの一つは、ことばの意味論的な機能である。

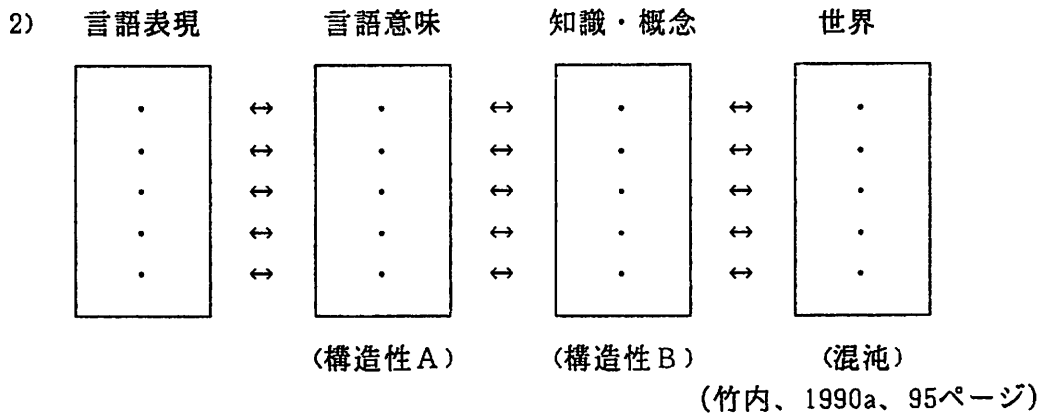
私は、本研究申請以前にまとめた論考「言語・文化論序説 — ことばと文化の関係を整理する」（1990b、91b、92a、言語文化論究 1、2、3号）において、ことばの意味論的な機能とことば働き全体との関係を図（1）にまとめた。言語表現は、意味の規則、言語行為の規則、そして、コミュニケーション参加者の知識の総体の働きを通じて、何らかの効果（影響）・解釈を獲得する。この効果（影響）・解釈は歴史・社会・文化というコンテクストにおいて始めて人間にとっての意味を構成することができるのだが、この言語表現を媒介にして意味に到達しようとする営為の総体が、言語コミュニケーションである。言語コミュニケーションは、コミュニケーション参加者の知識を介して、歴史・社会・文化・人間という現実には起源を持ち、さらに歴史・社会・文化のコンテクストにおける人間にとっての意味を介して、現実に影響を及ぼす。

1.2. 言語固有の意味と人間の認知システム

前項、(1) 図では「人間にとっての意味」という表現が用いられているが、この表現について私は、およそマックス・ウェーバーが「意味関係 (Sinnzusammenhang)」という用語に込めたものを想起している。また、「言語行為としての意味」については、サールが言語行為論において論じたことがらを想起している。ところで問題は、「言語表現の意味」である。何らかの人間にとって有意な効果・解釈というのは、言語行為の規則、そして、コミュニケーション参加者の知識の総体が働いた結果の出力（アウトプット）である。しかし、この出力が得られるためには、入力（インプット）が必要であり、その入力とは、サールのいう命題的内容 (propositional content) のようなものであるのかもしれない。あるいは、言語表現の意味とは、ソシュールのいう、所記 (シニフィエ)、つまり、聴覚映像に対して記号という関係において向かい合っている概念映像のようなものかもしれない。

いずれにしても、そのような入力要素なしには、言語コミュニケーションの成立はありえないのであり、それを私は、ことばの意味論的な機能と呼んだ。しかし、すでに上に触れたように、この「ことばの意味論的な機能」とは何であるのかは、それほど明解な訳ではない。言語表現に対応づけられるべき意味とは、どのような性質のものであるのか。本研究の申請に先行する論文「意味の言語固有領域確定のための考察」（1990a、言語科学、25号）で、私は、この問題を扱うことの難しさを論じたが、そこで私は、問題を図（2）に整理した。

世界について私たちは、知識や知覚の働きがなければ、何もわからないだろう。つまり、構造化された認識は不可能であり、その意味で解釈の枠組を前提としない世界そのものは構造を持たず「混沌」としている。知識や知覚の働きのおかげをこうむって、ようやく私たちには世界の認識が可能なのである。ところで、知識は現実の変化に柔軟に対応することができなければ（少なくとも、誤った認識を与えるという意味で）役に立たない。そして、役に立たない知識などは知識の名に値しないのであるから、私たちの知識



や概念の構造はその変化しやすく、柔軟で融通のきく性質を宿命づけられている。他方、言語表現は世界について何かを写しとり、情報伝達の媒介をするのであるが、記号という約束事のシステムを構成しているという言語表現の性格は、その恣意的な変化と柔軟な使用の可能性を制限づけている。言語表現の構造と意味・情報の構造の間には安定した写像関係が最大限に保証されていなければならないからである。

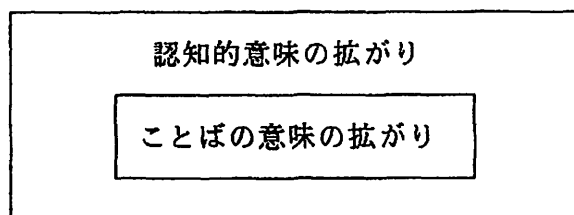
自動車という概念が、廃車置き場に積み上げられた鉄とプラスチックのかたまりのどれに当てはめることが可能で、どれには可能でないか、ということは、私がそれを修理して使おうと思うか、それとも資源リサイクルの対象と見なすかに依存するかもしれない。また、修理して使うと思うかどうかは、私の財布の中身、車の外見についての見栄、環境保護についての判断などに依存するかもしれない。古い車を修理して使うことは、安上がりであるが、格好悪いし、資源の浪費は防ぐかもしれないが、より質の悪い排気ガスをはきだして、環境により多くの負担を与えるかもしれないからである。ところで私は、「自動車」という言語表現を、私が自動車という概念を当てはめることをしなかった対象に用いることはできない。また、自動車という概念を当てはめるかどうか迷った、という知識の働きを正確に反映させながら、言語表現によって直接に（単一の語彙、または単純な語彙の組み合わせによって）対象を名指すことは、私の知る限り、日本語では不可能である。

言語表現の構造と意味・情報の構造の間に安定した写像関係が最大限保証されるべきであるというのは、一方では、言語運用上の実際的な要請である。他方、言語表現の構造と意味・情報の構造の間に何らかのプロセスを設定し、より複雑な写像関係を構成しようとする試みは、妥当な説明的必然性が存在しない限り、退けられるべきである。モンタギューに代表される形式文法は、文法構造と意味構造の同形性を追求してきた。あるいは生成文法の展開の様々な場面において、文法構造の構造的明快さをあやふやにする変形というプロセスを駆逐することが繰り返し試みられてきた。このような試みは、上述の科学理論的な要請に根拠づけられることなのである。

言語コミュニケーションにおける情報の提示が言語表現の構造的性に依存している以上、図(2)における言語意味は、言語表現の持つ形式とより密接な関係にある。言語意味は言語表現の持つ構造的性に依存した構造的性Aを持つ。それに対して、知識・概念は世界

に対する人間の認識・認知活動を表しているのだから、その構造的性Bは必ずしも言語形式に依存している必要はない。私たちは、ことばの文字面に囚われる偏屈な人格、不毛な議論、不自由な社会、などのことを見聞きしているが、そのようなことがらを反省する限りでは、むしろ知識・概念の内容は、言語形式から自由であるほどに、より豊かなものになるのだとも考えられる。以上の関係を私は上述論文（竹内 1990a）で（3）図に示したが、言語表現の提示する意味構造（ことばの意味の拡がり）は、私たちの知識・概念によって構造化された世界（認知的意味の拡がり）を部分的・限定的に写像しているにすぎない。

3)



（竹内、1990a、88ページ）

1.3. 言語固有の意味をめぐって

1.3.1. 言語固有の意味へのアプローチ

これまでの議論から、「言語表現の意味」あるいは「ことばの意味論的な機能」について一応の定義をすることができる。以下（4）に定義されるのが、「言語表現の意味」あるいは「ことばの意味論的な機能」であり、それは、本研究の標題に則して言えば「言語固有の意味」についての暫定的な定義である。

4) 言語固有の意味についての暫定的な定義:

言語固有の意味とは、言語表現によって表現される、ことばの構造に依存した意味のまとまりであり、知識・概念システムによって捉えられる世界を部分的・限定的に写像している。

しかし、この定義では、言語固有の意味がどのようなものであるのかということは、具体的にはまったくわからない。私は、本研究においてまとめた、理論的考察「自然言語の基本問題 — 世界についての知識と自然言語固有の意味との関係について」（1991a、言語科学 26号）において、日本語の動詞「のぼる」と「あがる」の意味構造を（5）と（6）のようなものであるだろうと提案した。動詞「のぼる」が言語表現として担う情報として、最低限残さなければならないと考えられる意味単位は、[移動]、[苦勞]、[対象]、[位置]、[上への方向]、[起点]である。それに対して、動詞「あがる」について言語表現として担う情報と考えられる意味単位は、[移動]と[起点]だけである。この区別によって、山田進が「ことばの意味、1、辞書に書いてないこと」（柴田武編、1976、平凡社）に指摘した二つの表現の違いが説明される。さらに、例えば、

[苦勞] の要素が「のぼる」の意味構造に含まれている必要性は、(7-a, b, c) の例文を比較することによって示すことができる。

5) 「のぼる」の意味表記:

$$\left[\begin{array}{l} \text{do X} \left[\begin{array}{l} [\text{move X}] \\ [\text{make_effort X}] \\ [\text{object [move X] OBJECT}] \\ [\text{locate [move X] LOCATION}] \\ [\text{direction [move X] up}] \\ [\text{from START}] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(竹内、1991a、50ページ)

6) 「あがる」の意味表記:

$$\left[\begin{array}{l} [\text{become [be X up]}] \\ [\text{from START}] \end{array} \right]$$

(竹内、1991a、45ページ)

7-a) 花子はヘリコプターで背振山にのぼる

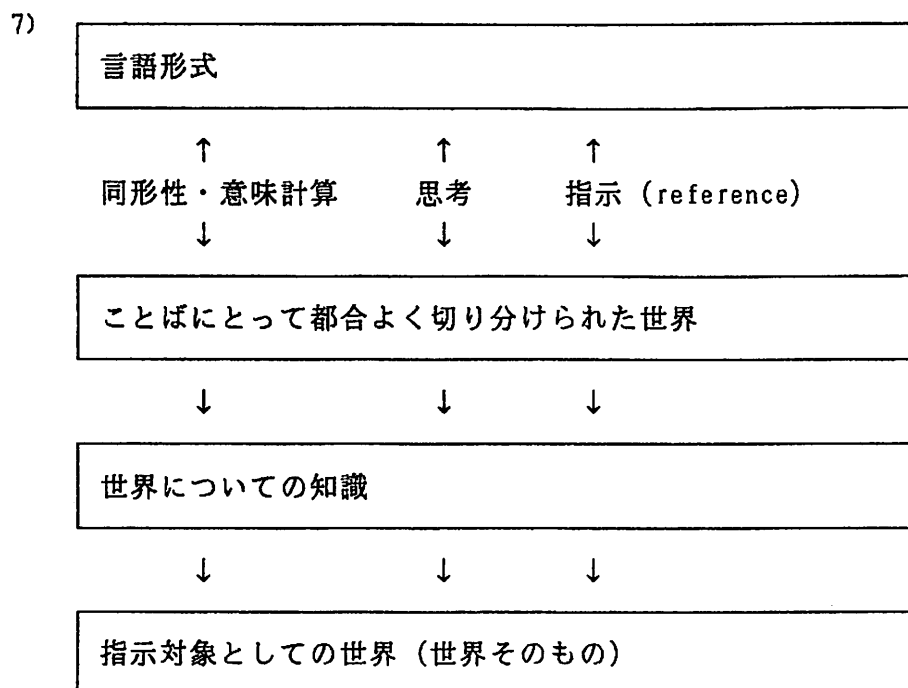
7-b) 花子は自動車で背振山にのぼる

7-c) 花子は自転車で背振山にのぼる

(竹内、1991a、50ページ)

山頂に達する苦勞の量は、乗り物がヘリコプター、自動車、自転車と異なることによって違いがあるだろう（この違いは認知的な要素である）。そのような苦勞の量が少ないと解釈される情報と「のぼる」という動詞の意味構造は相性が悪い。基本的に、このような相性の悪さは、認知的な概念としてののぼると苦勞の少なさの関係なのであって、言語表現について「選択制限」というような用語で語られる性質のことからではない。しかし、既に述べたように、言語表現の意味構造は、認知的な概念構造を部分的・限定的に写像しているのであって、それは、言語表現を正しく使用するのに欠くことのできない最低限の情報のまとまりである。認知的な概念としてののぼるは、(5)に提示したものより、はるかに豊かで柔軟な構造を持っているのかもしれない。しかし、「のぼる」という動詞の意味構造に写像されているのは、最低限(5)に提示したようなものであって、この意味構造は言語表現と非常に密接な関係にある。だからこそ、このような例文を用いて、文の適格性を議論しながら、言語表現の意味構造についてある程度の推定をすることが可能なだろう。

私は、上述の論文（竹内,1991a）において、言語表現の形式、言語固有の意味、認知、そして世界の関係を、図（8）にまとめた。



（竹内、1991a、52ページ）

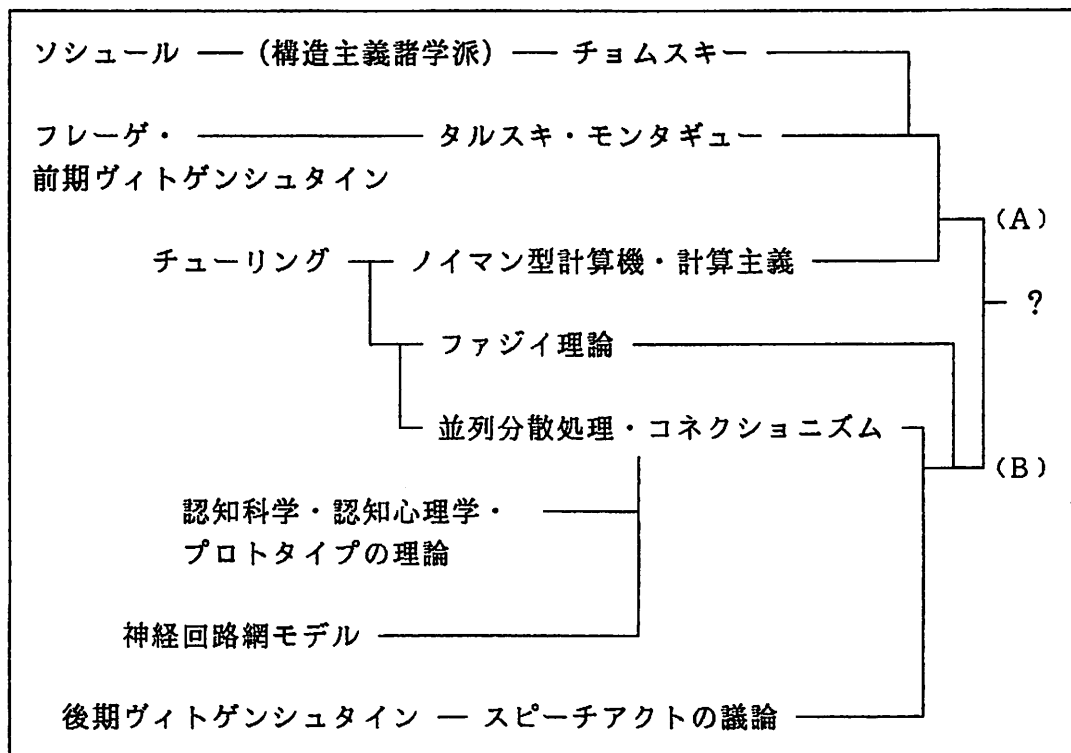
言語形式は、ソシュール以来重ねて議論されてきたように、記号の線条性に制約づけられた示差と弁別の原理を基本に成り立っている抽象的な単位の構造的複合である。この構造を基本にして、フレーゲの原理として知られる構成性のメカニズムに従って意味計算が行なわれる。（8）図で私は言語固有の意味について「ことばにとって都合よく切り分けられた世界」という表現を用いた。一方では、認知システムにおける意味計算・情報処理においては、少なくとも、構成性のメカニズムに従った意味計算＝記号的な演算だけが行われているのではないらしい。他方では、言語研究の伝統が想定する言語的な意味計算は、言語表現の形式性に束縛され、または依存する、基本的に記号的な演算なのである。

言語固有の意味の計算がそのような「言語表現の形式性に束縛され、または依存する」性格のものである以上、その演算の対象となる世界は、人間の知性・感性の求めるがままに自由自在・融通無碍に構造化されているとは考えられない。少なくとも、言語固有の意味の演算の対象となる世界は、言語に依存して構造化されていて、強い言語相対論によれば、それは人間の認知世界全体に対応する。しかし、私は、すでに述べたように、この言語固有の意味の演算の対象となる世界を、人間の認知世界全体の部分的写像であると考えている。私の立場は、ごく弱い言語相対論の立場といえるだろうが、そのような考え方によって、言語固有の意味の演算の対象となる世界について「ことばにとって都合よく切り分けられた世界」という表現を用いたのである。

1.3.2. 言語システムと認知システムの平行関係

現在にいたる言語関連諸科学の歴史を振り返っても、言語と人間の認知する世界の関係をめぐって、人間の認知を言語とより密接なものとして捉え、または、言語の意味処理を記号主義的に扱おうとする立場と、認知システムをより柔軟な性質のものとして捉えようとする立場が、ある種の平行関係をたどってきた。私は、論文、「表現対象（モデル）の意味論からことばの意味論へ — 言語と知識の平行理論にむけて」（1992d、西日本ドイツ文学、4号）において、この平行関係の流れの大ざっぱなスケッチを、(9) 図のようにまとめた。一方では、言語学の伝統、論理学・論理文法の伝統、オーソドックスな計算機科学の伝統は（A）に収束する流れを成している。他方では、認知科学の研究、神経回路網の研究、スピーチアクトの研究など、そして、計算機科学のオーソドックスな伝統に認知科学や神経回路網の研究を取り込む形で、ファジー理論、コネクショニズムなどの新しい考え方が、（B）に収束する流れをなしている。前項ですでに述べたように、言語固有の意味は、人間の認知的世界像の部分的写像である。このことを考慮すれば、「？」で示した（A）と（B）との収束は、（A）のシステムに、（B）の流れが、その一部分として取り込まれるのではないだろうかとは私は予測する。

9) 言語をめぐる現代科学の流れ



(竹内、1992d、2ページ)

(B) の流れには、全体論的で、神経回路網的・平行分散处理的な、また、人間の行動を包括してとらえようとする考え方がまとめられている。他方、(A)の流れは、デジタル指向の、記号主義的な考え方がまとめられている。しかし、もう少し考えを進めて

みると、大脳の左右半球はおよそデジタル・アナログの役割を分担し、しかも、その互いに無関係な働きによってではなく、相互協調的働きによって、より豊かな人間の存在を可能にしている。そうすると、そもそもは、(B)の流れについては、アナログ的要因と、デジタル・アナログなどの処理の統合の役割を果す全体論的な要因を区別して考えなくてはならないのだろう。

デジタル・アナログの統合が、右半球主導で行われるのだろうか、脳全体でなされるのだろうか。この問題について、どのような考え方が提案されていて、どれが妥当なのかということは、私の勉強した限りではよくわからなかった。結局は、結論の出にくい、難しい問題であるに違いない。しかし、いずれにしても、人間の脳の認知システムは、言語の固有意義計算にかかわるデジタル・記号主義的な知識処理と、その他のアナログ・画像・空間・感情・イメージ、運動・行動などの様々な処理システムが全体論的に協調することによって成り立っている。そのような大きなシステム内において、言語の固有意義にかかわるシステムは（デジタル・記号主義的という意味で）特殊なサブシステムとして際だった存在であるとしても、やはり、全体の中の一部に過ぎない。言語の固有意義は、そのような限定的な性格を持ちながら、全体としての人間の知的存在を可能にすることに貢献しているのだろうと思われる。

1.3.3. 言語システムと認知システムのインターアクションの結果としての意味の揺れ

私は、前述の論文（竹内、1991a）において、以下に引用する議論によって、言語テキストの理解が、文脈、特に人間の知識の働きに依存していることを示そうとした。これは、九州大学の薬学部・二年生のドイツ語（教養部）の授業で、実際に数十人の学生が頭をひねっても理解できなかった例である。内容としては取るに足らないことがらであるが、大の大学生が、ことばの情報だけに頼ってしまって知恵や想像力を働かせないと、適切な理解には至ることができないで頭を抱え込んでしまう。

10) Das Schlagen mit dem Schweif ist eine Äußerung des Unwillens, der gewöhnlich durch Empfindlichkeit des Rückens oder der Lenden verursacht wird ...

（尻尾を打ちつけるのは、背中や腰が「empfindlich」であることからくる不機嫌さの表現である ...）

テキスト前後の関連から、テーマが馬のことを扱っていることがすでにわかっている。そのことは、「シッポを打ちつける」というような表現からもわかる。そこで、この馬の背中や腰について「Empfindlichkeit」という表現が使っている。この表現は、「empfindlich」という形容詞の名詞化なのだけれど、それがこの場合にはどんなことを指し示しているのかが難しかったようである。「empfindlich」という形容詞には、例えば、三修社の「現代独和辞典」では「感じやすい、敏感な ...」というような日本語が示してあり「gegen Kälte empfindlich（寒さに弱い）」というような用例が示してある。

それでは、この場合、この馬の背中や腰にとっての「Empfindlichkeit」には、いったいどんな意味を付与したら、全体の解釈はうまくいくのか。馬の背中や腰のことだから、そのような個所が、精神的な感受性を持つ可能性は除外してよい。寒いということもあるかもしれない。しかし、馬の寒さというのは背中や腰について特に言及するようなことなのだろうか。馬の背中や腰が痛いのもかもしれない。しかし、身体が痛いというのは、不機嫌であるというようなことよりも。もう少し大変なことのような気がする。私は、これは、背中や腰のような場所のことだから、きっと「かゆい」のではないだろうかと思う。「そういえば、牛や馬の背中にアブや蠅がたかかっていて、尻尾で追い払っているなあ」などと、高原の牧場へピクニックに行った時のことなど、思い出したりすることもある。

(竹内、1991a、56ページ、但し文番号など一部変更)

大学における外国語教育の現場では、なぜか、言語の記号的な側面のみが意識されすぎている。別の見方をすれば、そもそもはフルに活性化されなくてはならないはずの学習者の想像力と全知性を抑圧して、ことさらにつまらない時間を耐えて過ごすという伝統がある。このような伝統の成立については、日本の教育システム全体の問題と、学ぶ側、教える側双方の怠慢が複雑に絡み合っているのだろう。このような現実には早急に改革されなくてはならないことは確かなのであるが、悲しいことには、大学における外国語教育の現場は言語理解の実践における「知性と想像力の墓場」のみごとな例を提供し続けているのである。

ところで、上の例は、言語理解において知性と想像力が適切に働かなければ、状況に応じた適切な解釈をえることができないことを示している。逆に言えば、知性と想像力が適切に働くことによって、言語表現に付与される意味・解釈が様々に変化しうるのである。ことばを換えれば、この変化の可能性こそが、人間の言語使用を豊かにしているに違いない。ある限定された言語表現を使うことによっても、私たちは、相当に多様な情報や、微妙なニュアンスの違いまでを伝えることができる。それは、言語表現に対して情報が固定的に結びつけられているのではなく、知性と想像力の働きによって柔軟に対応づけられるからだと考えられる。

私はこの研究プロジェクトにおいて、このような、ある表現に対してある程度の「ゆるさ」をもって対応づけられる解釈の幅を「意味の揺れ」という用語によって表現した。そして、この「意味の揺れ」を引き起こし、またそれにもかかわらず、情報交換・コミュニケーションのある程度の質を保証しているのは、私たちの知性と想像力の働きであると考えている。このような、人間の知性と想像力の働きについて、現代の科学用語に従って、ここでは「認知システム」の働きと呼ぶ。

コミュニケーションにおける言語表現についての「意味の揺れ」という現象が認知システムの働きに強く支えられて実現しているということは、上に示したような例を観察することによって、確かめることができる。認知システムが働くことによって、意味の揺れ・実際の言語理解を実現させると考えられるのは、認知システムの働きかける対象として、他方に言語システムが働いていることが前提となっている。この場合、認知シス

テムと協調して、実際のコミュニケーションにおける意味の実現に貢献するのは、当然、前項までに議論してきた言語固有の意味のシステムということになる。言語システム、より狭い意味では、言語固有の意味のシステムと認知システムが協調・インターラクトすることによって、意味の揺れ・実際の言語理解は実現している。

1.3.4. 言語固有の意味領域の確定のために

ところで、言語固有の意味のシステムと認知システムが協調することによって、意味の揺れ・実際の言語理解が実現するとしても、意味の揺れ・実際の言語理解については、外延的に記述することが可能である（例えば、「Empfindlichkeit」に対応する意味の揺れの一つは馬の背中や腰のかゆみである）。しかし、認知システム、および、言語固有の意味のシステムについては、これまでの議論では、そのような対象について、どのようなアプローチが可能であり、どのようなことを確認できるのかは明らかではない。複雑な認知システムの全体、またはその様々なサブシステムをどのように記述するのかということは、とても言語研究フィールドのみにおいて扱える問題ではない。しかし、言語固有の意味のシステムについて、それがどのような対象であって、どのような記述が可能であるのかということは、言語研究の看板をかかげる人間にとっては、決して「手に負えない」ではすまされることではない。言語研究の目標は、言語に固有の問題について、単純明快である必要はないが、可能な限り明示的な説明を与えることにあるからである。

私が、(1.3.1.)で示した、日本語の動詞「のぼる」と「あがる」についての意味記述の試みは、上に議論した言語固有の意味のシステムへのアプローチの一つの形態である。言語表現について、その文法的ふるまいを手掛かりにしながら、その抽象的な意味構造に迫る方法は、現代の言語研究の伝統において広く採用されている。このような研究方法の思弁的性格と、分析の有効性を疑問視する批判は、理論というものを目指さない伝統文法の擁護者からも、また、経験とデータに基づく科学の方法を重んずる経験諸科学の側からもなされ続けている（後者については、最近の議論としては、雑誌「言語」に哲学者、土屋俊が認知科学や計算機科学の視点を踏まえて提起している一連の挑発的な議論（土屋 1990、1992）が例としてあげられる。）前者からの批判については、なんらの代替的な科学性への提案も伴わないのであるから、無視しても構わないだろう。しかし、後者からの批判については、それが科学の方法についての最も基本的な要請に基づいている以上、単純に無視してしまうわけにはいかない。

言語の抽象的レベルの問題に迫る方法として、構造主義以来の言語研究の伝統が有効さを全く欠いているとは、私は決して思っていない。言語が、私たちの多くの知的行動と同様に無意識的に生起していることから、その対象に対しての接近は、一定の外的または、客観的な判断基準を組み込んでいるならば、ある種の主観に基づいた方法によることは、避けがたいことである。上に触れた日本語の動詞「のぼる」と「あがる」についての議論では、様々な言語表現要素との共起による、言語表現としての適格性と、解釈の可能性の変化が考慮された上で、言語上の直感に基づいて、分析が提案されているのであって、その作業そのものがまるっきり無効であるということはない。

い。むしろ、このような作業によって、やはり、言語表現を使い分けている私たちの言語能力は認識上の構造を与えられ、理解の対象となるのである。

他方、主に経験的なデータに基づいた、議論の組み立てというものが言語の抽象的な研究について可能であるのかどうか。または、少なくとも、半ば主観に基づいた今日の言語研究の伝統的な方法に、より経験的な傍証を付け加えることが可能かどうかについて、行動主義に反対する論議が下火になって以来、決して真摯に議論されてきたようには思えない。言語研究がより経験的なデータに基づくことが可能かどうかという問題は、行動主義的方法の妥当さについての議論とは別ものであるにもかかわらず、言語についての主観的なアプローチの優位性が不必要に強調され過ぎてきたようなところがある。確かに、言語研究については、主観にもとづくアプローチが有効かつ欠くべからざるものである。しかし、それであっても、より経験的なデータに基づくアプローチが絶えず摸索されるべきであり、そのような可能性は追求されなくてはならないことなのである。

2. 方法

今回のプロジェクトにおいて、私は、言語固有の意味の問題への経験的なアプローチとして、テキスト・データベースを利用して、言語表現の意味の揺れの実際を記述・収集し、そのデータの分析から、その意味の核心の同定へと至る方法を提案・採用した。その方法について、この章では簡単に紹介しようと思う。より詳しくは、私の論文「テキスト・データベースから採取した言語表現資料に基づいてリレーショナル・データベースソフトウェアを利用して言語記述作業を行うためのマニュアル的ノート」（1992b、言語科学 27号、36-55ページ）を参照してほしい。

2.1. 経験的なデータの選択について

言語研究の抽象レベルにおける記述対象への経験に基づくアプローチが可能であるのかという問題は、それがどのように可能であるのかという問題と密接にからんでいる。しかし、この二つはそれぞれに独立の問題である。記述の対象が記述システムの外にある以上、記述の妥当性は記述システム外の諸関連に依存していなければならない。システム内における論理的整合性などは、記述の妥当性を保証する最低限の条件にすぎない。言語現象そのものについて言語使用者が「なにを考えるか」よりも、言語が諸要因の複合のどのような連関において現象として現われるのかが経験的なデータとして尊重されなくてはならない。例えば、言語使用者の言語表現に対する文法性の判断についての資料は、たとえ言語使用者の直観に依拠しているとしても、そのような意味で経験的なデータでありうる。言語使用者の直観が言語使用に対して示す「文法的に適格・不適格」の判断は、記述システムの外部に存在する諸要因の複合の連関なのである。

同様に、ある言語表現についてどのような言語理解を行ったかのプロセスについて言語使用者が自分で語る内容は、内省的な記述に過ぎない。しかし、「言語理解を行った結果、ある言語表現が、ある言語使用者にとって、ある内容を持っていた、つまりある読みがなされた」という事実の集積は、経験的な事実を構成する。これらの事実の集積を

手がかりに、言語研究者は人間の言語使用についての説明的言明を、より検証に耐え得るかたちで提示することができる。言語研究者は、説明をデータから導き出すだけではなく、仮説をデータに照らして検証し、それに耐えないものは改良、または放棄することができる。

言語表が認知システムとインターアクションすることによって、様々な解釈が成立するのであるが、そのインターアクションの一方を構成する言語表現の背後には「言語固有の意味」がある。これが私の議論の前提であるが、この言語固有の意味の構造に迫る考察の基盤にすえることの可能な経験的データとしては、さまざまな諸要因の連関が想起できる。言語使用における脳の働きを、針を差し込んで電流を検出したり、ポジトロンCTを用いるなどして観察することも可能だろう（現実の問題として、そのようなデータは、文科系の劣悪な研究条件においては、容易に採取可能・かつ有効に利用できるデータではありえない）。心理学者が試みるように、言語使用における言語使用者の反応を客観的に計測することも可能であろう。上に議論した、「ある言語表現について言語理解を行った結果がある言語使用者についてある内容を持っていた」という事実の集積は、そのような経験的なデータのの一つとして、決して不適格なものではない。

この研究プロジェクトでは、上に述べたような、言語使用の実際としての言語表現の理解・解釈を記述・収集し、そのデータを議論のベースに採用した。その利点は、少なくとも二つある。一つには、以下に述べるように、このタイプのデータは、テキスト・データベースによる検索を利用すれば容易に採取可能である。二つ目には、貧困な研究条件においてもある程度の手間と時間さえかけて分析作業を行えば、有効に利用することができる。たいていの人文科学の分野においてそうであるように、十分なデータが与えられた場合、分析作業の成否を決定するのが分析作業を行う研究者の忍耐と、思考の脈絡をつないでゆく辛抱のいる努力なのである。

2.2. テキスト・データベースを用いた資料の収集とリレーショナル・データベースソフトウェアを用いた資料の分析

計算機の発達によって、人間は様々な恩恵とその被害を蒙っている。言語研究ということを考えれば、テキスト・データベースを用いた資料の収集の可能性もまた、その恩恵の一つである。テキスト・データベースを用いた検索によって、研究者は、すべてのテキストを自分で読むという作業による検索と較べると、とてつもない効率で、ある言語表現についての使用例を集めることができる。しかしこの便利さと引き換えに、研究者は、人間にとって最も大切な作業の一つである「読む」という経験の機会を奪われてしまう。

「読む」という経験と人間の存在の全体性の相互依存関係を思い起こしてみよう。読む作業は読む主体という知的存在者の関与なしには無意味である。少なくともある程度以上の知的質を前提とした意味での人間の存在の全体性は、読むことによる学習・経験なしには想い浮べることすらできない。そのような大切な「読む」という作業を省略する（すつとばす）ことによって、研究者は瞬時に大量のテキストを検索し、ある言語表現

の使用例を採取することができる。

ところで、そのような手抜きへの代償を研究者はどこで支払うのだろうか。少なくとも私たち研究者は、いとも簡単に吐き出されたデータを目の前にして、それを相手に格闘する労苦を思わずにはいられない。データに対する処理が頻度調査におけるように比較的単純であるとしても、その後には、単純な作業の結果である無味乾燥な数値に対して解釈を行う作業が待ち受けている。ましてや、言語表現のそれぞれの使用例に意味づけ・解釈を行いながら、データ整理を行おうとする場合は、研究者は採取において「読む」ということの手抜きをした代償を、まさに分析において支払わなくてはならない。

(少なくとも今日の) 計算機には、構文解析や、ましてや理解を伴いながら検索をする、などということは(研究の要請に応えるような質を伴っては)できない。それぞれの言語例の記述においては、特に記述対象が複雑で微妙な内容にかかわっている場合には、研究者は結局、「読む」という以前に省略した作業を補いながら、データについて処理を行わなくてはならない。つまり、テキスト全体の脈絡と、自分の知識、又は、自分の知らなかった知識との関連を確認しながら、自分の納得できる理解に至るまで、テキストと格闘しなくてはならないのである。

今回のプロジェクトでは、テキスト・データベース検索によって採取した言語表現の使用例を記述するのに、リレーショナル・データベース・ソフトウェアを利用した。実は、リレーショナル・データベース・ソフトウェアを利用したことは、ある意味で、この研究の方法の根幹にかかわっている。以下にリレーショナル・データベース・ソフトウェアを利用したこととの関連で、この研究の方法について簡単に触れる。

研究者には、記述対象である言語表現の使用例について、(ある程度の予測は立てているにしても) どのような分析結果がでるのか、そのことについてわかってはいない。わからないから、わかるために、資料を集め分析するのである。ところで、分析を行う場合には、分析項目がわかっている場合と、そうでない場合がある。今回の研究では、まさに、言語表現の意味の構造を明らかにしようというのであるから、そもそもどのような分析項目について記述すべきなのかがわかっていないのである。このような場合には、記述すべき分析項目は、まず仮説的な対象の構造化に従って設定する。そして、記述・分析の過程で問題が起きる度に、仮説を修正し、修正した構造化に従って、新しく分析項目を設定し直すのが実際の・かつ有効な作業手順である。

このような作業を行うについて、リレーショナル・データベース・ソフトウェアを利用すれば、作業中の記述データ構造の変更が比較的容易であるし、記述データ構造の変更の度に、これまでに記述したデータについて、その分析内容を繰り返し手直し・更新することができる。私たちが通常行っている、経験に基づいた科学的思索に求められているのは、まさに、思考の硬直の排除と、現実に即した理論構築のために絶え間ざる努力である。記述・分析の作業において、実際のデータは仮説的に想定された構造化のもつ問題を示してくれるのが通常であるが、「仮説→記述→問題→仮説修正」のサイクルを、より柔軟に、より根気強く繰り返すことにより、私たちの科学の歴史は、よりもっとも

らしい知見に到達してきた。

このような「仮説検証」の繰り返しは、私たちの知的な思考そのものと（少なくとも部分的には）同等のものである。むしろ、記述対象であるデータが複雑あるいは大量である場合には、計算機のような補助手段が「柔軟」に利用できれば、それは、末端的な事柄についての正確な記憶と逐次処理に著しい困難をもつ人間の脳の作業を補完するという点で、非常に有効な作業でありうるだろう。この作業の特徴を、私は、散文的であるが、以下のようにまとめた。

- 11) ... 言語資料に繰り返し繰り返し分析を加え、幾度も予測を変更してゆく過程において、言語表現の様々な意味のヴァリエーションの基底を成している意味の骨組みが抽象化されていった。言語資料の記述・分析を試行錯誤的に繰り返す過程そのものが、言語表現の基底にある何らかの抽象的な意味構造への、洞察を得る作業なのである。それは、言語資料そのものの背景を成す、言語テキスト生成の過程に含まれる様々な指向性のベクトルを探り当て、整理し、さらに、その言語構造に固有な複合的ベクトルの結合の可能性を抽出する作業であるともいえる。

(竹内、1992b、52ページ)

2.3. 方法の経験性をめぐって

言語使用者が記述者本人である場合、そのことはある種の誤解と混乱を招くかもしれない。警察の密室で行われた取り調べによる自白の有効性が疑わしいのと同様な理由で、データの出所と、そのデータを更に解析する者が同一の人間であることは、データそのものの信憑性を損なうかもしれないからである。この点で、今回の研究で採取された言語資料に解釈を与えたのは、まさに実際に研究者自身であったことは、明らかにしておかなければならないが、以下、それにもかかわらず、このことによって何の実際的な問題も生じないことを議論しておく。

警察の密室における自白と、言語使用者が記述者本人であることの、第一の違いは、後者が「科学」という枠の内で行われることであり、研究者の「良心と良識」に従って行われることであるということである。もちろんこの第一の違いを示したのは、冗談のようなもので、私は次のような反論を期待している。いかに苛酷であろうとも警察の取り調べもまた「良心」に従って行われているにちがいない。同様に、科学の枠組における「良心と良識」なるものも疑わしいものであるにちがいない。科学者もまた、自分の思い込みに従って、良心の呵責なしにデータを改竄する、または、データの読み違えをすることは当然あり得る。

そこで私は、第二のより本質的な違いを示す必要があるのだが、それは、公開性の問題である。裁判という制度が正常に機能するものであるならば、警察の密室における自白について、それが強制や誘導と無関係に、厳密に自由意志に従ってなされたものであるのかということに、きびしい検証が加えられるだろう。そして、その要件を満たさない

自白には証拠としての位置づけがなされないだろう。この点で、自白というデータは「密室における」というレッテルから自由でない限り、経験的な議論のベースとして価値を持たない。他方、言語使用者が記述者当人であるとしても、私の判断・思考のプロセスは閉ざされたものではない。私は、私がどのように思惟したのかを隠す意図などないし、むしろそれを明らかにしたいのだ。もちろん、私はここで、次の反論に出合うだろう。私の思考のプロセスなどを他者が覗き見ることなどできる筈がなく、私の思惟などは密室そのものである。確かに、私は、私の思惟そのものの妥当さを主張できるだけであり、それを証明することはできない。その点では、密室における自白が自由意志に基づくということについて、主張のみが可能であり、その証明が不可能であることと、私の思惟の密室性の間に質的な違いはない。

三番目の違いとして挙げたいのは、こんどは冗談ではなく、間主体的な検証可能性の問題である。司法が正常に機能するものならば、自白については、その具体的な証拠についてのきびしい調査がおこなわれ、自白という資料は具体的な証拠を補完する参考資料とみなされるにすぎないだろう。しかし、具体的・客観的な証拠によって裏づけられ検証されるならば、「密室性」がついてまわる問題を別にすれば、自白という資料が無駄なわけではない。同様に、私は、私の思惟そのものについて、その正しさの証拠を私の思惟の外部に求められるだろうか。私の思考・判断の対象は、言語現象・人間の言語理解プロセスである。この対象についての私の思考・判断の正しさは、主に、私以外の人間もそのように考えることができるかどうかという追試験に対して開かれていることによって保証される。

私たち人間の相互理解が、認知システム・生理システム、そして言語・コミュニケーションシステムの（疑似？）共通性によって、可能であることは前提である。私たちは通常、少なくとも複数の気圧メーターが同一の表示をしている場合、その表示の正しさを、理由がない限り疑わない。同様に、例えば「言語表現の理解」などについて、ある理解が、他の理解と食い違わない場合、その妥当さを疑うのは理由がある場合だけである。もちろん、多数による誤解・誤認・思い込みは避け難いが、その誤りを指摘できるのは、ただその誤りに気づくことのできる者だけである。そして、その誤りの指摘もまた、相互理解のための共有のベースに依拠してなされるのである。

いずれにしても、記述する主体の主観が、記述の依拠するデータの間主体的な妥当性を損なう危険は大きいのであって、それを避けるためには、細心の注意がはらわれなくてはならない。それでは、データの間主体的な妥当性を確保するために研究者の側からなにができるのかというと、それは、あらゆる検証の可能性を外部に開いておくことであり、そのためには、研究者が「良心と良識」に従うという当たり前の努力を最大限に行うことになる。以上の前提が守られるならば、本研究が採用する方法とデータの経験的な妥当性はある種の限定の許に保証されることになる。

3. 分析と考察

およそ、以上に述べた問題意識と方法に従って、具体的な言語事実の記述・分析を行っ

た。この研究プロジェクトにおいて、実際には、その前半にドイツ語の形容詞「empfindlich」、後半に「schwer」と「leicht」の対の記述・分析がなされた。それぞれの分析結果、および、諸考察は、次に挙げる論文にまとめたが、以下本章は、その概略の紹介、または補完なので、内容は、相当部分論文本体と重複し、また変更が加えてあるが、重複個所に一々引用の根拠を示さない。

議論のベースになっている文献：

1993a: 「自然言語における言語固有の意味の追求 — テキスト・データベースによって検索したドイツ語の形容詞『empfindlich』の使用例についての意味の揺れの記述から」(金沢大学文学部紀要、文学科篇)

1992c: 「意味解釈に対する統語関係の未決定性と、意味理解・知識処理における言語表現の意味関係の役割について — テキスト・データベースによるドイツ語の形容詞『empfindlich』の記述から」(ドイツ文学論集、25号)

「言語表現の意味理解と認知システム — ドイツ語の形容詞『schwer』と『leicht』の解釈における推論、類推、比喩・見立て・イメージの拡がり、認知型の働き」(1992、口頭発表済み、1993b、印刷準備中)。

3.1. 分析と考察 I: 「empfindlich」

形容詞「empfindlich」を記述・分析の対象に選んだのは、第一章の予備的考察で紹介したように、その理解がコンテキストによってはかなり難しく、また「意味の揺れ」の範囲が大きいと予想されたからである。

3.1.1. 使用したテキスト・データベース

この形容詞の使用例を採取するテキスト・データベースとして私は九州大学大型計算機センターが公開している「トーマス・マン・ファイル」を利用した。このテキスト・データベースには、フィッシャー社から出版されているトーマス・マン全集の全テキストが収められていて、内容が主に文学者の凝った文体のテキストなので、言語研究の資料としては特殊であり、決して最適のものとは言えない。また、テキストの成立時期から言っても、すでに半世紀またはそれ以上経過したものであり、現代すでにすたれた用法も多かった。この点で現代ドイツ語の共時的な記述対象としては、多くの難点を含んでいる資料であった。反面、文学作品などにおいては、言語表現がより幅広く、凝った使われ方をされるとすれば、言語表現の意味の揺れの記述・分析を目指す本研究の目的と必ずしも合致しないわけではない。いずれにしても、このような特殊なテキスト・データベースを用いたのは、研究者である私の研究条件に依存していることである。将来的に光学文字読み取り装置(OCR)などがより簡単に利用できるようになれば、一般的に言語研究のためには、より自然なテキスト・データベースからの言語使用例の採取が望ましい。(そうこうするうちに、金沢大学の文学部でも、おそまきながら光学文字読み取り装置が購入できることになった。今回の研究には間に合わなかったが、書類書きの手間ひまを惜しまなかった結果、研究環境をわずかながらでも変えることができたことを報告しておく)

3.1.2. 分析 I

3.1.2.1. 言語表現「empfindlich」の抽象的な意味構造

「Empfindlichkeit」などの派生語を除いて、形容詞「empfindlich」の使用例は全テキスト・データベース中で 75例だった。これらについて (2.2.) で導入した方法に従って分析を加えた結果、「empfindlich」の意味には、その骨組みとして二項述語である「be_influenced_from」を核とする (12) のように形式化されるものが抽出された。

12) (be_influenced_from X Y)

人間の生活を支える知識システムの重要な構成単位の一つが「影響の授受関係」であるが、その受動的な側面を抽象的に形式化したのが、(12) における二項述語

「be_influenced_from」である。この述語「be_influenced_from」について、より一般的な、人間の認知システムにとっての基本的な単位・素性による分解が可能であり、

(12) は、(12') に書き換えられる。Y は Z が変化することの原因であり、かつ、変化する Z は X に属している。

12') (cause Y (change Z)) & (belong Z X)

「X」はおよそ、「影響を受け取る主体」であり、「Y」はおよそ「影響を与える何か」、そして「Z」はおよそ「影響を受けること・もの」である。採取した具体的な使用例の中からいくつかを取り上げ、(12') に抽出・形式化した形容詞「empfindlich」の言語固有の意味の枠組の解説を試みる。例文の最後につけられたインデックスは、フィッシャー版のトーマス・マン全集の出典を示していて、「#」に続く最初の二桁の数字が巻、次の三桁がページ、終りの二桁が行に対応している。

13) Adrians Heiratsidee hatte sich als der Unsinn erwiesen, der sie war, und daß er sich dazu hergegeben, sie ihr zu unterbreiten, hatte sie sehr übelgenommen, sie war zum Entzücken empfindlich dagegen gewesen.
(#0659010)

この場合、X は彼女、つまり「人間」であり、Y は意味のない求婚を伝えにきたという「自分に対する他者の行為」であり、Z は「気分の状態」である。つまり、意味のない求婚を伝えにきたということが彼女に影響をあたえ、怒るという「気分の状態」の変化を引き起こす。

14) ich erinnere mich, daß an jener Abend ... meine Niedergeschlagenheit, die mein Gemüt ... zu befallen pflegte, besonders empfindlich gewesen war.
(#0731334)

この場合も、X は私=話し手、つまり「人間」であり、Y は自分の打ちひしがれた気分

という「自分の精神の状態」である。そして、Zは、心の安定という「精神の状態」である。つまり自分の打ちひしがれた気分が原因となって、私＝話し手に属する心の安定が変化して、暗い気分になってしまうということである。(コミュニケーション上の「empfindlich」の意味合いは、この例の場合、自分の打ちひしがれた気分の「強さ」ということにあるが、このような用例はかなり多かった。どうしてそうなるのかということは、別の機会に検討したいが、おそらくは、この報告の後半でふれる「解き明かせないことがら」に属する問題なのだろうと思う)

- 15) aber dann kam Föhn auf, vorausgesagt, vorausgewittert von
erfahrenen und empfindlichen Gästen: Frau Stöhr ... spürten
ihn einstimmig schon ... (#0350303)

この場合も、Xはサナトリウムの療養客、つまり「人間」であり、Yはフェーンが吹くこと、つまり、「気候にかかわる事態」である。Zは前の二つの例と違って、「精神や気分の状態」ではなく、気候に関する直観である。つまり、まもなくするとフェーンが吹くことが原因となって(原因にかかわる時間関係は逆転しているが)、サナトリウムの療養客に属する気候に関する直観が変わる。つまり、フェーンが吹くことを予見するのである。

- 16) ich rede nicht über die Abhängigkeit des Solisten von der Begleitung,
obgleich sie unter Umständen sehr empfindlich werden kann, und wenn
ich Sie nicht hätte (#0150022)

ここでも、Xは私、または一般に音楽の愛好家、つまりところ人間である。Yはソリストが伴奏によりかかること、つまり、「他の人間の演奏にかかわる様態」である。そして、Zは、音楽的感性である。つまりソリストが伴奏によりかかることが原因となって、私、または一般に音楽の愛好家の音楽的感性が変化を被る。具体的には、音楽的感性がソリストが伴奏によりかかることによりを不愉快を経験するのである。

- 17) Aber die Mordsucht folgte ihm durch Europa, und eine schreckensreiche
Flucht aus Südfrankreich mag seinem empfindlichen Herzen den ersten
gefährlichen Stoß zugefügt haben. (#1050106)

この場合、Xは人間ではなくて、彼の心臓、つまり、人間の「内臓」である。Yは南フランスからの(ナチスの追及を避けての)逃避行の厳しさを原因とする打撃という「心身にかかわる事態」である。そして、Zは、心臓の調子という「内臓の状態」である。つまり南フランスからの逃避行の厳しさを原因とする打撃が原因となって、彼の心臓に属する心臓の調子が変化して病気が悪くなる。

- 18) In seiner Benommenheit beging er geschäftliche Fehler, so daß die
Firma Castorp & Sohn empfindliche Verlust erlitt; (#0303221)

この例のように、X は人間ではなく、カストルプ & ゾーン社という会社、つまり「人間の作る組織」でもよい。Y は彼のした失敗という「会社の経営にかかわる事態」であり、Z は「会社の経営の状態」である。カストルプ & ゾーン社は彼のした失敗の影響を受け、「会社の経営の状態」が悪くなるという変化を被る。

- 19) ... , wenn Kammersänger ... endlose und recht stumpfsinnige Schmiedelieder schmetterte, so daß die empfindlicheren Dekorationsstücke des Salons, Vasen und Kunstgläser in ein erregtes Mitschwingen und -schwirren gerieten. (#0636912)

さらにこの例のように、ほとんど純粋に物理的な現象もまた、影響の授受関係として、形容詞「empfindlich」による表現の対象となる。X は花瓶やガラス細工、つまり「物」であり、Y は歌手が大声で歌うこと、つまり、「物質にかかわる事態」である。また、Z は花瓶やガラス細工が通常の静かな状態であることである、それは、このコンテキストでは、「物が振動する可能性」なのである。歌手が大声で歌うことの影響を受けて、花瓶やガラス細工が花瓶やガラス細工が通常の静かな状態であることから振動している状態へと変化して、ピリピリと震える。

さらに、挙げなくてはならない例もあると思うが、紙数の制限もあるので、この程度で、ひとまず、形容詞「empfindlich」について仮定した、言語固有の意味としての抽象的な意味構造についての事例による説明を終る。

3.1.2.2. 言語表現「empfindlich」の意味の拡がり

採取された使用例の全体においては、X = 「影響を受け取る主体」、Y = 「影響を与える何か」、Z = 「影響を受けること・もの」の三者はそれぞれ、(20)図、(21)図、(22)図のように、より具体的な内容にかかわる拡がりを示していた。

「(be_influenced_from X Y)」、または「(cause Y (change Z)) & (belong Z X)」という、意味の枠は共通のものであって、その変項 X、Y、Zに(20)図、(21)図、(22)図に示したような多種多様な要素が代入されることができる。その結果が「empfindlich」という形容詞が示している具体的な意味の揺れなのである。

言語表現の意味が、このように言語固有の意味の共通の枠組について、表に示せただけでも複雑な要素の代入によって成り立つのだとすれば、通常の言語辞典の意味記述が充分でないことは当然の帰結である。

例えば、三省堂の「クラウン独和」では「empfindlich」について三項目の記述がしてありそれぞれの項目をさらに細分したり、さまざまにニュアンスの異なる日本語や英語の語彙を当てはめたり、例文を挙げたりしながら、限られたスペースを活用して語彙の用法をできるだけ網羅的に提示しようという努力がなされている。

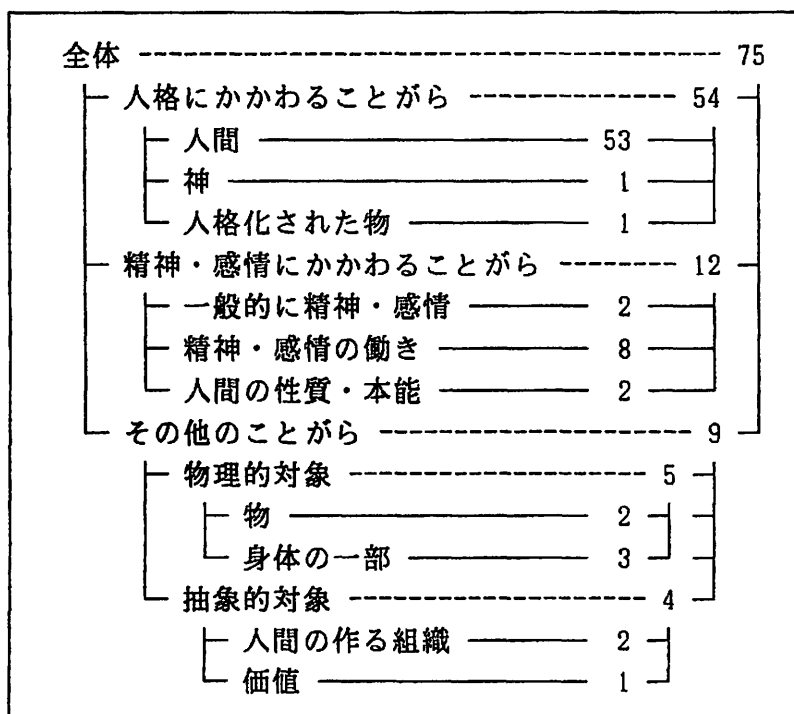
「クラウン」の記述を無理を承知で要約する。(i)の項目は英語の「sensitive」に相

当する意味合いであり、(a)の「(刺戟に)敏感な」、(b)の「精密な」、(c)の「傷みやすい」に細分化されている。(ii)には「(心理的に)傷つきやすい」という説明がカバーする意味合いが挙げられ、(iii)には英語の「painful」に相当するという説明が日本語の「肌身にこたえる」などの語彙と共に挙げられている。

しかし、このような記述の努力にもかかわらず、これでは、これまで観察したようなわずかな例すら、充分には説明できない。上に議論したような、代入による要素の組み合わせ原理の上に成り立つ意味の世界の豊穡さは、単純に考えても、辞書記述などでは蓋い尽くせるはずがない。だからこそ、辞書というのはいかに厚いものが出版されても、なおまだ、不満が残ってしまうのである。

ここでの図示において採用した様々な分類の仕方と用語は、分析対象であるデータを整理するためのものである。おそらくは、人間の認知構造の研究が進展したある段階で、このような分類的な用語の標準が確立する時がくるのかもしれない。しかし、当面の目的のためには、記述対象のデータに依存した暫定的な分類・概念化でこと足りる。また、より厳密な考えを取れば、むしろ、この議論における用語について、人間の認知構造についての用語と区別しておくことが必要でもある。この研究の目的は、まさに「自然言語の固有の意味」と「人間の認知構造」との関係性を明らかにしようとするところにある。事項以下、この問題を扱ってゆくが、この項目での議論では、一応、導入された分類の仕方・用語は人間の認知構造と関係ないものとしておこう。

20) X = 「影響を受け取る主体」の拡がり



21) Y = 「影響を与える何か」の拡がり

| | |
|--------------------|----|
| 未来の事態 | 1 |
| 外的条件の感受 | 1 |
| 知覚できずの不在対象 | 1 |
| 宗教・政治的関係 | 1 |
| 外部からの気配 | 1 |
| 社会にかかわる事態 | 1 |
| 社会にかかわる情報 | 1 |
| 家事にかかわる事態 | 1 |
| 会社経営にかかわる事態 | 1 |
| 金銭にかかわる事態 | 1 |
| 学業にかかわる事態 | 1 |
| 心身にかかわる事態 | 1 |
| 身体にかかわる事態 | 1 |
| 物質にかかわる事態 | 1 |
| 気象にかかわる事態 | 1 |
| 雰囲気 | 1 |
| 他者 | 1 |
| 他者の存在 | 1 |
| 他者にかかわる事態 | 2 |
| 他者の演奏の様態 | 1 |
| 他者にかかわる情報 | 1 |
| 他者の行為 | 4 |
| 他者の芸術上の行為 | 1 |
| 他者の思考 | 1 |
| 他者の心の動き | 1 |
| 自分に対する相手の態度 | 1 |
| 自分に対する他者の行為 | 3 |
| 自分に対する相手の行為 | 1 |
| 自分に対する他者の言語行為 | 4 |
| 自分にかかわる人間に対する行為 | 1 |
| 自分にかかわる事態 | 5 |
| 自分にかかわる他者の行為 | 1 |
| 自分にかかわる人間関係についての事態 | 1 |
| 自分についての情報 | 1 |
| 自分の精神の状態 | 2 |
| 自分の身体について生じた事態 | 2 |
| 自分の回りの出来事 | 1 |
| 自分の身体を取り巻く環境 | 3 |
| 自分と他者の関係にかかわる事態 | 1 |
| 自分が関心を払っていることから | 1 |
| 不特定 | 17 |

22) Z = 「影響を受けること・もの」の拡がり

| | | |
|--------------|----|----|
| 全体 | | 75 |
| 状態 | | 55 |
| 人間にかかわる状態 | | 49 |
| 心にかかわる状態 | | 42 |
| 精神の状態 | 22 | |
| 名誉心の状態 | 1 | |
| 気分の状態 | 17 | |
| 感情の状態 | 2 | |
| 一般的に感情の状態 | 1 | |
| 愛情の状態 | 1 | |
| 身体にかかわる状態 | 7 | |
| 一般的に身体の状態 | 4 | |
| 感情を表現する器官の状態 | 1 | |
| 内臓の状態 | 1 | |
| 皮膚の状態 | 1 | |
| 何かの状態 | | 6 |
| 利害の状態 | | 3 |
| 一般的に利害の状態 | 2 | |
| 人生についての利害の状態 | 1 | |
| 運営・進にかかわる状態 | | 2 |
| 会社の経営の状態 | 2 | |
| 経済状態 | | 1 |
| 個人の経済状態 | 1 | |
| 何らかの対象 | | 3 |
| 思想 | 1 | |
| 価値の高さ | 1 | |
| 存在 | 1 | |
| 潜在的可能性 | | 17 |
| 人間の能力 | | 16 |
| 精神的な能力 | | 12 |
| 一般的な精神的な能力 | 8 | |
| 一般的な知性・感性 | 7 | |
| 外部に対する関心 | 1 | |
| 芸術にかかわる能力 | 4 | |
| 一般的な芸術的感性 | 1 | |
| 音楽的感性 | 3 | |
| 精神にかかわらない能力 | | 4 |
| 性にかかわる情動 | 1 | |
| 異性に対する関心 | 1 | |
| 知覚的能力 | 3 | |
| 身体感覚一般 | 1 | |
| 聴覚 | 1 | |
| 気候に関する直観 | 1 | |
| 人間にかかわらない | | 1 |
| 潜在的可能性 | | 1 |
| 物理的な | | 1 |
| 潜在的可能性 | | 1 |
| 振動の可能性 | 1 | |

3.1.3. 考察 I

3.1.3.1 考察 I-a: 意味の拡がりとは知識システム

前項に示した、図 (20)、(21)、(22) はそれぞれ、形容詞「empfindlich」の言語固有の意味の枠組に代入される意味要素の拡がりを表わしている。この項では、これらの代入された意味要素の拡がり・分布を観察し、言語固有の意味と、認知的な意味の世界とがどのようにつながっているのかという、基本的な問題を考察しようと思う。

X = 「影響を受け取る主体」と Z = 「影響を受けること・もの」の具体的な意味の拡がりには、(20) 図と (22) 図に観察されるように、比較的是っきりとした構造を示している。それに対して、 Y = 「影響を与える何か」の具体的な意味の拡がりには、(21) 図に観察されるように、全体の構造的なものであることが見られない。これらの拡がり、比較的是っきりとした構造をもっていたり、そうでなかったりすることは興味深いことである。

前項で議論したように、これらの図に分類分けされて示されたさまざまな種類のことがらは、さしあたっては、言語表現にかかわる意味として、人間の認知システムとの関係については考えていなかった。しかし、言語システムが人間の認知構造に影響を与えないことがあっても、逆に人間の認知構造が言語システムに影響を与えないなどということは、考えにくい。私たちの言語は私たちの生活の総体・認知の上に成り立っているのである。私たち人間の認知とのかかわりから考えると、なぜ、「empfindlich」の言語固有の意味の枠組に代入される意味要素の拡がりについて、構造的な読み取れたり、読み取れなかったりするのかがわかってくる。

(12') の表記を踏まえると、 Z は述語 change の項であり、この項に当てはまる対象というのは 変化という事態が生ずる何か である。

一般に考えられているように、対象領域は人間の知識システムにおいて構造化され、格納されている。そうであれば、その知識システムから 変化という事態が生ずる何か の領域の構造が導出されるはずである。そのような、知識領域の構造がどのようなものであるのかということは、言語研究が直接あつかえる問題ではないが、(22) 図に観察されるような Z = 「影響を受けること・もの」の領域の拡がりとは重なり合うようなものであることが容易に予測される。

(22) 図に観察した構造は、まず、「状態」、「何らかの対象」、「潜在的可能性」に大別されている。更に「状態」は、「人間にかかわる状態」などに細分化され、「人間にかかわる状態」は、こんどは、「心にかかわる状態」などに細分化されている。私たちの常識が行う、私たちの世界についての分類・構造化は、変化という事態が生ずる何か について言えば、やはり、(22) 図に観察したものと近似のものになるのではないだろうか。

しかし、他方で、この構造は、具体的なデータの記述によって確認されたものであり、言語表現の解釈から導かれた構造である。だから、この言語事実から導かれた構造をそのまま、人間の認知の構造について何らかの主張を行うための強い証拠とすることは難しい。この構造がむしろ認知システムに由来していることを主張するためには、なんらかの人間の知識にかかわる実験・考察が必要であり、そのような隣接科学の展開を私たち言語研究者は期待することしかできない。しかし、少なくとも、言語データから、一定の明確な構造が導き出され、それが私たちの常識で考えられる。人間の認知構造と似ているということは、上の主張への「弱い証拠」ではありうる。(言語システムと認知システムの関係について言語研究の側から貢献するということは、少なくとも知識と言語の関係については、このような「弱い証拠」を積み上げてゆくことによらざるを得ないだろう。)

ここでは、私は、以下の議論の可能性を示唆し、近隣諸科学の研究の進展への期待と表明しておくにとどめる。

(22) 図に観察した構造は具体的な言語表現のデータから導かれたものであるが、しかし、人間の知識システムから導かれる構造と近似したものである。その理由については、その構造性そのものが人間の知識システムに依存したものであるからだと考える可能性がある。

項 X についても同様の議論ができる。項 X は、そのような変化という事態が生ずる何かを第二項とする述語 belong の第一項である。この項に当てはまる対象というのは、私たちの常識から考えれば、変化という事態が生ずる何かに対して所有的な帰属関係を持つことが可能な対象である。所有的な帰属関係という制約から、そのような対象が、人間であり、またはその他の様々な属性を備え持つもの・ことでありうることは、容易に想定できる。そのような構造を持った対象領域の拡がりを、知識システムは項 X に対して用意するだろう。(20)図に観察されるような X = 「影響を受ける主体」の領域の拡がりのもつ構造性は、言語データから導出されたものであるが、知識システムから項 X の分布について導出されると考えられる構造性と近似している。

他方、項 Y は、因果関係をあらわす述語 cause の第一項である。常識的に考えると、つまり、私たち人間の知識システムから導出されるものを予測するならば、因果関係の起因者でありうる「もの・こと」について何らかの制約というものは考えられない。何かの制約が考えうるとすれば、それはむしろ因果関係の結果である何ごとかとの相関関係によるのであろう。(例えば、会社の経営に影響を与えるのは、好景気・不景気・社員の質(志気・有能さ)・仕事の失敗などであるが、これらのことがらは、会社の経営についての損失または好材料についての知識から導かれるのであって、「影響を受ける」関係についての知識からではない)。知識システムから項 Y に対しては何らの構造的制約も導出されるとは想定されないのであるが、このこともまた、(21)図に観察されるような、言語データから導かれた Y = 「影響を与える何か」の領域の拡がりの無構造性と符合している。

私が以上の議論によって示そうとしたのは、人間の知識システムが抽象的な（言語の）意味構造に対して働いた結果として想定される出力が、実際の言語データの分析の結果と非常に近い関係を示しているということである。この近似関係は、多分、人間の認知の構造に由来するものである。前項で議論したように、言語固有の意味の枠組の変項である個所に様々な意味要素が代入されることによって、様々な意味の世界が一つの言語表現に結びつけられることができる。この結びつきの可能性による意味の拡がりの豊かさは、組み合わせの原理に従って保証されている。しかし、この意味要素の代入についての諸条件が、むしろ人間の認知の構造に依存しているのだとすれば、私たちの言語の豊かさは、組み合わせの原理に依存していると同時に、また、私たちの認知世界の豊かさ、つまり私たちの教養の豊かさ・奥深さにも強く依存していることになる。

言語表現の言語固有の意味構造は、人間の認知世界に対して少なくとも何らかの接点を持っており、そうでなければ、私たちは、言語を知的生活遂行のための強力な助けとすることができない。（この接点の喪失と、その結果である内容の貧困を皮肉な形で示すのが、恐らくは、カール・マルクスが批判する、逆立ちした学問なのだろう。）それでは、何がその「接点」の役割を果しているのかというと、一つには、言語表現の言語固有の意味構造が、人間の認知世界に対して開かれた代入構造を持っているということなのかもしれない。

この研究において私の提案するの仮説の側から見ると、このような言語固有の意味構造と認知システムの「接点」を介した、相方向的なインターアクションによって、私たちの言語生活は豊かなものとなっているのである。そのような豊かさとは、実際には言語表現の意味の揺れの示す、複雑な構造性に見て取られる。私たちは、この複雑な構造性を、言語固有の意味構造と認知システム相方向的なインターアクションによって説明することができるかもしれないという議論をしてきた。

具体的に、それぞれの文例において、個別の解釈がどのように成立するのかといえ、すでに（13）から（19）に挙げた例文を観察するだけでも、なかなか単純明快というわけではない。

例えば、（13）では、単純化していうと、形容詞「empfindlich」と直接の修飾関係にある表現「sie」、「dagegen」、「zum Entzucken」によって、それぞれ X = 「影響を受ける主体」、 Y = 「影響をあたえる何か」、 Z = 「影響を受けるもの・こと」が示されている。しかし、どのようにして、それらの表現によって示された人・対象・ことがら、 X や Y 、 Z として理解されるのだろうか。誠意のない結婚の申し込みについて、彼女は、怒るのではなくて、精神的に打ちひしがれてもよいはずなのである。しかし、そう理解しないほうが良いのは、この表現の直前に「daß ..., hatte sie sehr übelgenommen (...のことに彼女がとても気分を悪くした)」とあることが関係しているだろう。（読者の便宜のために、例文（13）をもう一度提示しておく）。

- 13) Adrians Heiratsidee hatte sich als der Unsinn erwiesen, der sie war, und daß er sich dazu hergegeben, sie ihr zu unterbreiten, hatte sie sehr übelgenommen, sie war zum Entzücken empfindlich dagegen gewesen.

私たちの認知システムが、どのようにして、「彼女がとても気分を悪くした」ということがらの理解と、「empfindlich」によって表現されることがらの理解を重ね合わせるのだろうか。「彼女がとても気分を悪くした」ということがらの理解を前提にすると、そのような知識と矛盾しない意味理解を「empfindlich」について導き出すために、私たちの知識システムは、(22) 図に示したような、「影響を受けること・もの」の拡がりの可能性から、「気分の状態」を選びだしてくるのだろう。

このことについては、さらに、互いに矛盾する副詞「zum Entzücken」と「dagegen」が、同時に形容詞「empfindlich」を修飾していることもまた関係している。私たちの認知システムは、この矛盾から副詞「zum Entzücken」を、アイロニカルな表現（「激怒して？」）として再解釈し、何らかの腹立ちに絡む対立関係が、「empfindlich」によって表現されることがらに関係していることを予測する。この予測は、上記の二つのごとを結びつけるのに役立ちながら、もちろん、より複雑な私たちの認知システムの働きと関係しながら、更には「empfindlich」のより適切な理解を指し示すのだと考えられる。

一つのごとを重複する表現によって指し示すことは、無駄なようであるが、余剰な情報が、情報のより確実な伝達に役立つことはよく知られている。ことがらの認識・理解はより確実になり、誤解の可能性がせばめられるのである。さらには、また一つのごとごらについて、多くの概念・イメージが重ねられることによって、より「厚く・豊かな」ものとなる。表現はより彩り豊かにメッセージを伝えるのである（程度の問題であるが）。

(14) では、例えば、X=「影響を受ける主体」が私=話し手であるということすら、形容詞 empfindlich に直接関係する構文関係からそのことが読み取られるわけではない。（「empfindlich」という言語表現の意味の核心にかかわる、X=「影響を受ける主体」や、Y=「影響を与える何か」、そして Z=「影響をうけること・もの」としてどのようなことがらが理解されるべきかということについてすら、統語的な関係だけからでは十分な情報が与えられるのではないことについては次の項で詳しく触れる）。私を表わす表現である「ich」や「mein」は、形容詞「empfindlich」に対して直接の修飾関係にないのである。（読者の便宜のために、例文(14)をもう一度提示した）。

- 14) ich erinnere mich, daß an jener Abend ... meine Niedergeschlagenheit, die mein Gemüt ... zu befallen pflegte, besonders empfindlich gewesen war.

形容詞「empfindlich」の修飾している名詞句「meine Niedergeschlagenheit」における所有表現「mein」が、統語的には一番「empfindlich」に近いが、これは X=「影響

を受ける主体」としての私を指し示しているのではない。この所有表現の指示対象が「影響を受ける主体」と同一であるのは偶然のことであって、この表現は「影響を受ける主体」を特定するために、ほとんど何も役に立ってはいない。

むしろこのことに貢献しているのは以下(a)、(b)、(c)に挙げる要因だろう。(a) 名詞句「meine Niedergeschlagenheit」を先行詞としている関係文「die mein Gemüt ... zu befallen pflegte」により私のうちひしがれた気分が私の気持ちに影響を与えることが示されていて、この内容と「empfindlich」によって表されている内容とが平行関係にあること。(b) 全体の話題の流れにおいて、私の敏感さに焦点が当てられていること。(c) 常識的な判断の働きによれば、私のうちひしがれた気分が影響を与える可能性の高い対象は私その人であること。さらに、この意味の特定のためには、より包括的な知識システムが働いているのだろう。つまり、そのような要因を認知システムが読み取り、総合的なすり合わせを行った上で、「影響を受ける主体」でありうる様々な可能性(図(20))から人間が選び出され、それに「私」が重ね合わされて、正しい「読み」とされるのだと考えられる。

3.1.3.2. 考察 I-b: 意味に対する統語関係の未決定性と認知システム

3.1.3.2.1. 意味に対する統語関係の未決定性

前項ですでに観察したように、「empfindlich」という言語表現の意味の核心にかかわる、 X = 「影響を受ける主体」や、 Y = 「影響を与える何か」、そして Z = 「影響をうけること・もの」としてどのようなことがらが理解されるべきかということについてすら、統語的な関係だけからでは十分な情報が与えられるのではない。例文(23)もまたそのような例の一つである。

23) Sonnenschein, Kaufmann, wie der andere, von Hause aus, war ebenfalls recht ernstlich krank und krankhaft empfindlich. (#0395113)

ここでは、 X は商人のゾンネンシャイン氏であり、つまり「人間」である。 Y は自分が嫌がらせをされつづけること、 Z はゾンネンシャイン氏の気分であり、つまりは「精神の状態」である。自分が嫌がらせをされつづけることによって、商人のゾンネンシャイン氏はその影響を蒙り、「精神の状態」が変化を受け、気分が滅入る。 Y は自分が嫌がらせをされつづけることである。ところで、 X がゾンネンシャイン氏であることは「empfindlich」が直接修飾する主語によって文中に表現されているから、それを読み取るのはそれほど難しくない。他方、 Y が自分が嫌がらせをされつづけることであることと、 Z がゾンネンシャイン氏の気分であることは、直接には文中に表現されていない。これらのことについては、コンテキストや、自分の知識の働きから導き出していくしかないのである。

24) Aber Wolken oder Nebel, auf jeden Fall war die Nässe empfindlich. (#0340419)

この例文においてもまた、言語の統語的關係は、「empfindlich」の意味關係の理解を成立させるためのほんの僅かの情報しか与えてくれている。X は療養所にいる患者たち、つまり「人間」であるが、このことはコンテキストからしか読み取れない。Y は、雲や湿気という「空気の状態」であるが、この情報は X が文の主語として表現されていることで与えられている。Z は「身体の状態」であるが、文中には直接表現されていない。療養所にいる患者たちが雲や湿気の影響を受けて、「身体の状態」に変化を受け、調子を悪くするというような意味の關係が読み取られるために、統語上の關係ではなく、むしろ、コンテキスト、および、「療養所にいる患者のことが話題になっていのだから、身体の調子・病気のことが問題であるに違いない」というような、私たちの知識が強力に働いているのである。

25) Und nun dies Hirn von umfassendster und empfindlichster Feinheit,
dies kostbares Sein... (#1045631)

この例文は、ホフマンスタールに対する追悼文からのものである。X がホフマンスタールという「人間」であるということは、この文が、ホフマンスタールに対する追悼文の構成部分であるというという全体の状況、および、そのことについての私たちの知識の働きから読み取られる。私たちの知識は、追悼文のなかで語られるのは、主に追悼される人間についてであると推論する。より正確には、追悼される人間については良いことが語られ、追悼される人間と親交のあった人間については、その悲しみや喪失感が語られるのだと推論する。

悲しみや喪失感ということに着目すれば、「empfindlich」の X = 「影響を受ける主体」は、むしろ追悼される人間と親交のあった人間と理解する情報処理が先行することもあるかもしれない。しかし、それをブロックするのは、この文によって直接語られているのが、つまり「empfindlich」の統語上の修飾対象が、「Feinheit (繊細さ)」という人間の美点についてであり、その美点が文の話題の中心である脳の性質であると表現されていることである。追悼文において、脳について語られるのも奇妙なことであるが、脳を知識の座に位置づける私たちの知識は、この表現を人格についてのものであると理解する。そのような推論が働くことによって、この脳の性質としての美点、「Feinheit」は、追悼される人間の繊細さであると理解される。

以上に示したように、形容詞「empfindlich」に關係する意味について、何が X = 「影響を受ける主体」であり、何が Y = 「影響を与える何か」であるか、ということは、この形容詞によって直接修飾されている文の構成要素が何であるかということとあまり關係がない。逆に見れば、この形容詞の理解において直接の意味關係要素である X や Y が何であるのかということについて、その統語關係から直接読み取ることはできない。

今回の検索によって得られた形容詞「empfindlich」の使用例は全部で75であるが、この形容詞が統語的に直接修飾している要素 A が、be_influenced_from の第一項 X と一致している例は39である。また、be_influenced_from の第二項 Y と一致している例は 19例である。それ以外の、例文 (25) によって議論したような、X と Y と一致

しない例は、その内容が様々であるが、17例ということになる。この数を表に示したのが(26)であるが、この表から、少なくとも形容詞「empfindlich」については、直接の統語的修飾関係はその意味関係の解釈に対して強い決定力を持っていないことがわかる。

26)

| | |
|-------------|----|
| A=X | 39 |
| A=Y | 19 |
| (A≠X)&(A≠Y) | 17 |
| 全体 | 75 |

3.1.3.2.2. 意味関係と統語主部の指示対象

この形容詞の統語的な主部 A が、be_influenced_from の第一項 X と一致している 39例について、この主部となっている名詞句が何についての表現なのかをより詳細に観察してみる。(27)表に示すように、この場合は、人間、あるいは、精神・知性の働きを表す表現が39例中30例で、圧倒的な多数を占めている。また A が、be_influenced_from の第二項 Y と一致している19例では、(28)表に示すように、すべて(精神的、肉体的、又は、経済的に)嫌なことがらが占めている。さらに A が、be_influenced_from の第一項 X と、第二項 Y ととも一致していない 17例においては、(29)表に示すように、影響を受けるということについての、その結果や、主体、場所や領域にかかわることなどが主なものを占めている。

27)

| | |
|----------|----|
| 人間 | 18 |
| 精神・知性の働き | 12 |
| 身体の部分 | 4 |
| 物・物質 | 2 |
| 繊細な道具 | 1 |
| 価値 | 1 |
| 性質 | 1 |
| A=X | 39 |

28)

| | |
|-------------|----|
| 精神的に嫌なこと | 11 |
| 肉体的に嫌なこと | 4 |
| 経済・社会的に嫌なこと | 4 |
| A=Y | 19 |

29)

| | |
|-----------------------|----|
| 影響を受けた主体の表情・身振り・発話 | 4 |
| 影響を受ける主体の肉体の部分表情・様態 | 2 |
| 影響を受ける主体の肉体の部分 | 2 |
| 影響を受けることが位置する場所・時間 | 2 |
| 影響を受けやすくする要因としての精神の高揚 | 2 |
| 影響の及ぶ様態 | 2 |
| 影響を受ける領域としての精神 | 1 |
| 一般的な雰囲気・精神状態 | 1 |
| 影響そのもの | 1 |
| (A≠X)&(A≠Y) | 17 |

以上の観察からわかるように、表 (27) 、 (28) 、 (29) にまとめられた、「empfindlich」の統語的な主部 A の位置を占める名詞句の表現しているものごとは、それぞれにかなりはっきりとした違いを示していて、これらの要素はほとんど「互いに素」であると言ってよい。

3. 1. 3. 2. 3. 知識プロセッシング

表 (27) に挙げられたようなことがらを表す名詞句が述語 be_influenced_from の第一項である主体の意味を付与されるということを説明するためには、「これらのことごとについての言語使用者の知的判断・常識の働き」、つまり私たちの認知システムの働きということを考慮にいれる必要がある。

3. 1. 3. 2. 3. 1. 認知システムの働きによる知識処理

私たちの常識によれば「人間や精神・知性の働き」が「影響を受ける」ことの「主体」である確率は非常に高い。例文 (23) で人間である「ゾンネンシャイン氏」に主体の意味が付与されたように、「die empfindliche Knabenseele (#0729535)」のような例においても、精神の働きである「少年の心」に主体の意味が付与されるのが常識的なのである。同様に「皮膚」などの身体の部分や、物、繊細な道具、価値などのものごとが傷ついたり、壊れたりするという意味で「影響を受ける」ことの「主体」である確率は高い。この表に挙げられている「性質」というのは、「... den Vater mit seinem empfindlichen System ... (#0257109)」に見られる「System」という表現を修飾する用例についてのものである。ここでは、ゲーテの精神・肉体込みの性質のことを「System (機械じかけ、または組織)」のように言い表している。私たちは「システムというものが壊れやすいものである」というような知識をもっているが、その知識から、この対象について、「影響を受ける」ことの「主体」としての解釈を与えるのである。

表 (28) では、すべてが嫌なことであり、中でも精神的に嫌なことが多数を占めている。

これが形容詞「empfindlich」の使用において、一般的に言えることなのか、それとも、マン個人の癖なのかはわからない。いずれにしても、この表から私たちは、「影響を受ける」関係において「嫌なこと」を「影響を与える」ものと結びつけることが、形容詞「empfindlich」の解釈にかかわる知識システムの記述として重みのあることであることを知ることができた（「嫌なこと」という記述そのものに、すでに解釈が含まれていて、そこには意味主体との「影響を受ける」関係が内包されている）。

先に挙げた例文（24）では、湿気が人間の忌み嫌うものであるという知識が働き、さらに、この「嫌なこと」が、「影響を受ける」という関係において、「影響を与える」ものと結びつけられるのである。次の例、「obgleich sie (= die Abhängigkeit des Solisten von der Begleitung) unter Umständen sehr empfindlich werden kann (#0150022)」では、独奏者が伴奏に寄りかかることが「気に入らない」ことであるのは、テキストにおける話題の流れや、音楽についての知識の側から与えられなくてはならない。また「empfindliche Verluste (#0303221)」のような例では、損害ということがらが「嫌なこと」であるのは、比較的単純に常識から導かれるのだろう。

3.1.3.2.3.2. 知識のネットワーク

(29) 表に挙げられた 17 のことからの内で8例は影響を受ける主体にかかわる何らかのことがらである。「ブッデンブローク家の人々」からの例である (30) を観察する。

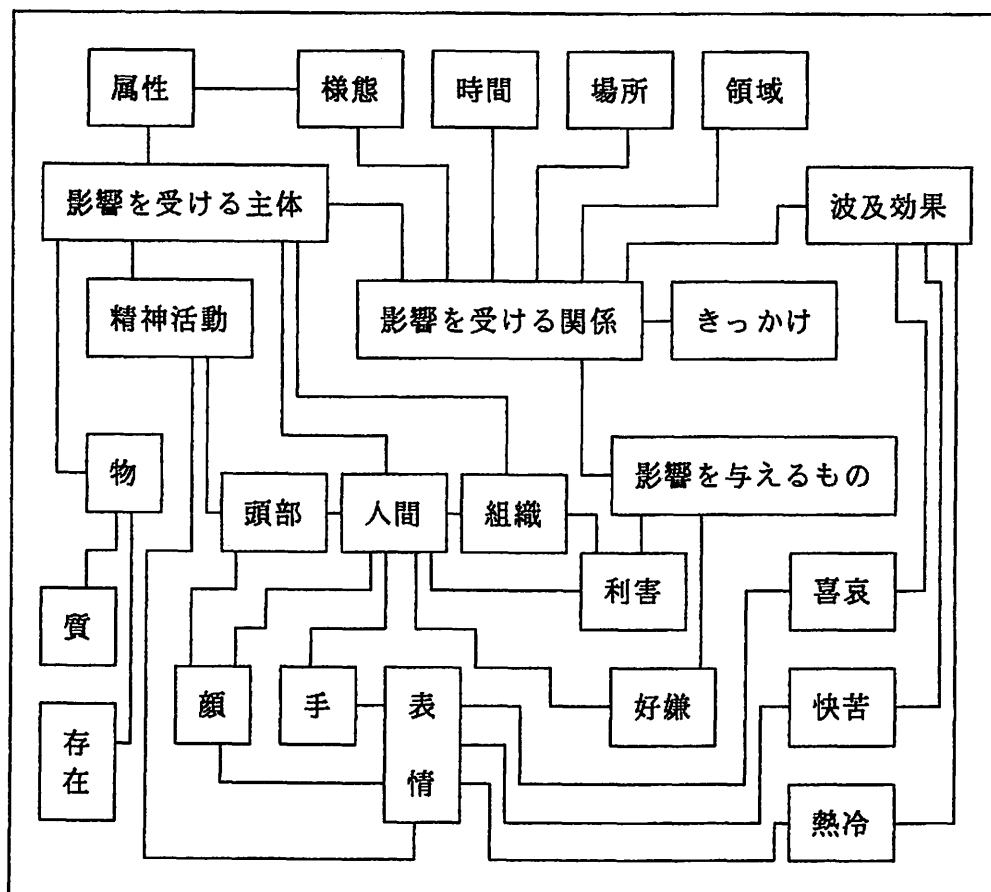
30) Der kleine Johann ... neigte den Kopf mit einer empfindlichen Grimasse ... (#0169315)

ここで、小さなヨハンは葬式の嫌な雰囲気の影響を受け、その波及効果として「しかめっ面」をしている。だから、影響を受ける主体は小さなヨハンであるが、言語表現の面では、形容詞「empfindlich」は小さなヨハンではなく、そのしかめっ面を直接修飾している。「大公殿下」からの例「Er hielt seine magren Hände von seltsam empfindlichem Ausdruck ... (#0214531)」、または「... die mageren empfindlichen Hände im Schoße gekreuzt ... (#0233829)」では、影響を受けやすい人間としての、影響を受ける主体は彼であるが、形容詞「empfindlich」は、その「手」、またはその「表情・様子」を直接修飾している。

さらに、「ヨゼフとその兄弟」からの「Es sind die Gehörtäuschungen empfindlicher Ekstase ... (#0511418)」の例のように、「empfindlich」が、影響を受けることを引き起こす「きっかけ」である「心の昂ぶり」を修飾するようなこともある。「混乱と幼い悩み」からの例「... für den, der eine allzu empfindliche Jugend überstand, ... (#0864729)」では、影響を受けることの起った人生における時期である「少年期」が「empfindlich」によって直接修飾されている。また、先に挙げた例 (25) では、影響を受けることについての「様態」を表す表現「Feinheit」が「empfindlich」によって直接修飾されていた。

一般に、私たちの知識は物事を相互の様々な関連の内に把握しており、その関連の複合が知識のネットワーク状の枠組をなしている。影響を受けるのには、その「様態」、時間、「場所」や「領域」、「きっかけ」があるだろう。影響を受ける関係は、その「波及効果」を持つだろう。そして、その「波及効果」は、「喜び」や「哀しみ」、「快さ」や「苦しみ」、「熱さ」や「寒さ」であったりするだろう。それらの波及効果は「表情」にあらわれるであろう。「表情」は、「人間」が「顔」や「手」という身体の部分を通じて提示するものだろう。「人間」とは「手」や「顔」、「頭」を持ち、「頭」の一部分が「顔」なのであろう。「頭」は「精神活動」の座でもある。「人間」はまた、「組織」を作り、「利害関係」に関わり合う存在でもある。そのような「人間」はまた、「影響を受ける主体」でもあれば、その「利害関係」を通じて、「影響を与える」側に関係することもある。「物」だって、その「質」や「存在」とのかかわりで、影響を受ける主体でもあることができる。(31)は、以上簡単に論じた形容詞「empfindlich」の解釈に関係する知識のネットワークのおおよそを図示したものである。

31) 「影響を受けること」にかかわる知識のネットワーク



図にあげられた、これほど多種多様のものごとく、「影響を受けること」にかかわりながら互いに結び合っていて、知識のネットワークを形成している。そして、それらが皆、

形容詞「empfindlich」の直接修飾する名詞句の指示対象であることができる。このような柔軟さは、実際驚くべきことであるが、ここで観察するようなテキスト理解の実際は、そのようなルーズで柔軟な処理がむしろ当たり前に行われていることを示している。知識処理の流れは、(31)のような知識の枠組の支えによって、その全体的なまとまりを作り上げてゆくことができるのだと考えられる。

例(30)の解釈においてテキストにおける話題の流れの中心は「小さなヨハン」という人間である。形容詞「empfindlich」の解釈について重要な意味関係である「影響を受ける主体」が「小さなヨハン」であるという情報はこの例の場合、統語関係からは得られない。この情報は、統語関係からではなく、文やテキストが表現している話題の流れに依存しているのである。「empfindlich」が直接修飾している「シカメッ面」については、それが「影響を受ける主体」の頭部の一部である顔の表情であり、かつ、影響を受けたことの波及効果である、ということが知識像として成り立てば、十分に意味伝達の役割を果たしているわけであり、そこには、知識のネットワークがうまく働いているのであろう。

3.1.3.2.3.3. 知識処理における言語表現の「方向づけと制約」の役割

前項最後に挙げた例(30)は、意味解釈についての重要な情報が、統語構造からではなく、テキストが表現している話題の流れから与えられることもあるということを示していた。(32)の表は「empfindlich」の解釈について、「影響を受ける主体」が統語上の主部と一致しない36例について、それがどのように表現されているのかを示したもの

32) X (影響を受ける主体) がどのように表現されているか (A≠Xの場合)

| | |
|---------------------------------------|---|
| 直接は表現されていない ----- | 9 |
| 修飾する名詞句を補語または目的語とする文の主語 ----- | 6 |
| 補語構文における与格名詞句 (svc/svoc) ----- | 4 |
| 修飾する名詞句を用いた前置詞句に係る動詞句の主語 ----- | 4 |
| 修飾する名詞句に係る所有表現/所有格名詞句 ----- | 3 |
| 修飾する名詞句を目的語とする授与動詞句の与格名詞句 ----- | 2 |
| 修飾する名詞句を用いた前置詞句に係る名詞句を修飾する 所有表現 -- | 2 |
| 上位文中の文成分 ----- | 2 |
| 補語構文における前置詞句 (für) ----- | 1 |
| 修飾する名詞句を補語とする文における前置詞句 (für) ---- | 1 |
| 修飾する名詞句を用いた分詞構文の主語 ----- | 1 |
| 修飾対象である文の与格名詞句 ----- | 1 |

である。直接言語的手段によって示されていない例は9例であった。さらに様々な言語的手段が、間接的な形で「影響を受ける主体」を示すために用いられている。

先に挙げた例文 (24) は、「影響を受ける主体」が直接言語的手段によって示されていない例の典型であるが、この場合、テキストにおける話題の中心は「wir」＝「サナトリウムの療養客」なのであって、その話題の中心が常識的に「影響を受ける主体」という解釈を受けている（「常識的に」というのは、「サナトリウムの療養客が人間である」とか、「人間は湿気の影響を被るものである」とかいう知識の複合的働きのことである）。また、短編「しっぺがえし」の中の例 (33) では、下線部に見られるような、「私はそれ（あなたの偉大な強さと自由）を受け止め、苦しんだ」という、説明的な、平行して同じことを繰り返す表現が、「影響を受ける主体」と「影響を与えることがら」を明示している。（例文 (24) は読者の便宜の為に再掲する）

24) Aber Wolken oder Nebel, auf jeden Fall war die Nässe empfindlich.

33) Ihre Stärke und Freiheit war so groß! Ich aber empfand es und litt darunter. So, und empfindlicher als jemals, war es eines Abends ...
(#0816410)

(33)に見られたような平行表現だけではなく、(32)表に示したような、様々な形で、言語表現は、有意味な意味理解を成り立たせるための情報を提供している。これらの情報の提示の仕方は、文法の形式性に裏づけられていさえすれば、非常に自由な形で行われ得るのだと考えてよいようだ。要するに、それらの言語表現によって、形容詞「empfindlich」の意味の枠組 (12) または (12') の変項が充足され・かつ意味理解のつじつまが持っているということが肝心なのである。

言語表現の意味理解のプロセスは、大きな視点から見れば、様々な部分的情報のある有意味な知的まとまりに加工する知識処理のプロセスである。そのプロセスは、ラメルハートとマクレランド他 (1986)、甘利 (1989) などが提案している、神経回路網と平行分散処理 (PDP) モデルと同等のものであろう。第一章でも触れたが、大脳は神経のネットワークとして働いている。言語の統語構造の比較的融通の効かない、固さにこだわれば、知識処理について記号主義的なモデルを想定したい。しかし、この章の議論が示すように、言語にかかわる知識処理といっても、実際は、言語の統語構造にそれほど強く拘束されない処理がおこなわれているようだ。言語表現の持つ意味の枠組、そしてその統語関係は、決して意味解釈を最終的に決定づけるほどの大きな役割を果しているようには考えられないのである。だとすると、そのような知識処理は、ニューラルネットワーク・モデルが示すような柔軟な処理によっていると考えた方がよいように思われる。そのような枠組における柔軟な意味理解のプロセスにおいて、言語表現は、ある限られた役割を果しているのにすぎないではないだろうか。

とは言っても言語表現は意味理解のプロセッシングにおいて、その流れを部分的、または、総体的に制約し、方向づける役割を果していることは否定できないし、する必要もない。形容詞「empfindlich」がテキストに用いられている以上、意味理解のプロセスでは、この言語表現の意味の枠組 (12) または (12') の変項が充足されることが要求される。しかし、このことは、テキストの意味理解において、その他の（部分）言語表

現の担う情報が全体に対してどのように位置づけられるのかということについてまで、解釈を拘束しはしない。むしろ、言語の枠組は、それぞれの（部分）言語表現の担う情報と競合し、他の（部分）言語表現の担う情報の指し示す意味理解プロセッシングに制約を加え、全体の意味理解に一定の方向性を指し示すのである。つまり、意味理解プロセッシングの全体のなかから、なんとかつじつまの合う形で、意味の枠組（12）または（12'）の変項、つまり「影響を受ける主体」や「影響を与えるもの」などが確定されることがのぞましいのであり、それは、形容詞「empfindlich」がテキストに用いられているということからくる方向づけなのだと考えられる。

この項での議論では、以上のような、言語表現の意味について「知識処理における方向づけと制約」という役割を割り振る、新しい見方が必要とされることを示した。比喩的な表現をすれば、意味理解プロセッシングの川の流れの中で、言語表現は、岩や堤防、そして杭や堰のように、川の流れに影響を与えている。その、影響の強さは、私たちの知識・常識の働き、テキストや文化・社会のコンテクストが与える制約などと比較して、より以上の物であるというわけではない。しかし、その影響を度外視して、川の流れを語る訳にはいかない。また、この働きがどの程度のものであり、どのような性質のものなのかは、本項が提示した新しい視点から、より具体的に研究されなくてはならないだろう。

3.2. 分析と考察 II: 「schwer」と「leicht」

この形容詞の対「schwer」と「leicht」を記述対象に選んだことについては、一つの一般的な仮説を前提としている。それは、人間が基本的に生物として物質的制約のもとに存在するものであり、その人間存在に付随する現象としての私たちの知識システムの相当の部分が物質的制約に由来するものであるにちがいないという、ある意味では一般的な予測である。私たちは確かに「empfindlich」のような、ある程度抽象的で不思議な表現を使うし、さらにより複雑、または単純に理解することの難しい、思想や宗教、または心や感情についての表現をも使いこなす。しかし、「empfindlich」にしても、私が考察したところによれば、「影響を受ける」というような、基本的には物質レベルの世界の関係を基本にしていた。

私たちの世界の基礎をなす、物質的制約にかかわる「関係」には、もちろん様々なことながらあげられるのであり、そのどれから始めても良かった。たまたま、私自身が大学の研究者という仕事を始めてから十年経ち、その重さに四苦八苦しているという個人的な事情から、「重さ」にかかわる形容詞に着目した。人生そのものには質量などはないのだから、「人生が重い」などと、重力についての表現を使うのは不可解なことである。しかし、このような「重さ」についての表現の使い方が、日本語だけではなくドイツ語においてもなされるし、その基底には共通の何かがあるのかもしれない。

実際、この重さについてもドイツ語の形容詞「schwer」と「leicht」は、実際のテキストにおける使用においては、重量以外のさまざまな使用がなされる。私は、この形容詞の意味の揺れを記述して、基本的には物の世界の関係を基本にしている「重さ」につい

ての表現が、どのように様々な、しかし特定のことがらを表現するのにも用いられるのかを考察しようと考えた。

3.2.1. 使用したテキスト・データベース

「schwer」と「leicht」の使用例は、これらの語彙が基本的な語彙に属しているということもあって、かなり頻繁にテキスト中に見いだされる。分析対象となる使用例の数は多いにこしたことはないが、実際の分析の手間と時間を考慮すると、せいぜい100例前後の例に目を通すことしかできない。また、必要な場合には、一応の分析が終了した段階で、さらに多くの例について分析を加えるべきかを考えればよい。以上の条件により、適当な量の例を集めるためには、トーマス・マン・ファイルを総て検索する必要はなく、「魔の山」のファイルを扱うだけで充分であった。

3.2.2. 分析 II

「魔の山」のファイルにおける、それぞれの語彙の使用例は、「schwer」について80例、「leicht」について103例採取された。それぞれの語彙がどのような意味合いで使用されているのかというと、以下(34-s)、(34-l)に示すようにその使われ方の幅はかなり大きかった。しかし、これらの使用例の中で、純粋に重量にかかわる用例は(35)に示すように、ごくわずかであった。(純粋に重量にかかわると考えられるものの例を(36-s)、(36-l)に示す)。

34-s) 重量の重さ、動作の鈍さ・ゆっくりした様子・力強さ、気持ちの暗さ・不安さ、病状の悪さ、身体のだるさ、気だるさ、行為・仕事・課題の困難さ、刺戟の強さ、味の濃さ、衝撃の強さ、音の低く力強い響き方、拘禁の嚴重さ、歪みのひどさ、罵り・怒りのひどさ、罪の重さ、ものごとの大切さ、身体の部分が垂れ(下がって)いる様子、等々

34-l) 重量の軽さ、動作の少なさ・弱さ・激しくないこと・容易に行われる様、気持ち・雰囲気人間の明るさ・陽気で享樂的な様子、話しの内容が真面目でないこと、威厳に欠けていること、行為・仕事・課題の容易さ、遅刻の程度がひどくないこと、色づき・変形の少ないこと、怒り・敵意・輕蔑の少なさ、身体の弱さ、布の薄さ、粉のフワフワした様子、物事の大切でないこと、質が高くないこと、空気・気候が乾燥していて気持ちがよいこと、味覚が薄く・刺戟が弱いこと、衝撃・エネルギーの弱さ、等々

35) 形容詞「schwer」の重量にかかわる輕重についての使用例: 80例中 8例
形容詞「leicht」の重量にかかわる輕重についての使用例: 103例中 1例

36-s) Die Bände waren schwer, unhandlich ... (#0338217)

36-l) Auf seinen Knien lag ein leichter Gegenstand, ... (#0392510)

これらの使用例について、分析を加えた結果、(35)に示された数値にもかかわらず、やはりこの二つのドイツ語の形容詞「schwer」と「leicht」について、その意味の核心部分は重量にかかわる「重さ」と「軽さ」であるという結論に至った。この意味の核心こそが、本研究で追求する、言語固有の意味に相当するものである。この分析の内容は、以下の考察の論考と重複するので、この項では触れない。

3.2.3. 考察 II: 言語固有の意味(意味の核心)から言語使用上の意味の派生について

前項に述べたように、採取された使用例を観察・分析することによって、「schwer」と「leicht」の意味の核心を抽出した。それぞれの形式的な表記を(37-s)、(37-l)とするが、これは基本的に重量についての軽・重に対応すると考える。

37-s) (heavy X)

37-l) (light X)

以下では、「重量についての軽・重」をそれぞれ形容詞「schwer」と「leicht」の意味の核心であると仮定して、そこから様々な「schwer」と「leicht」の解釈が派生として説明することを試みる。(実際の分析では、逆に、個々の解釈が派生によって説明されると推測されることによって、意味の核心としての「重量についての軽・重」が抽出された)。言語の意味の核心部分と知識システムとのインタラクションによって、テキスト・データベースによって確認された個々の解釈が導き出される、ということをも具体的な例に触れながら議論したい。

3.2.3.1. 考察 II-a: 概念的認識構造に依存した意味の読み取り(推論・類推による派生)

様々な意味理解の可能性を、基本的な意味である重量にかかわる軽重からの派生・導出として説明するとしても、リストに示された多様性を見る限り、その導出のあり方は、単純・一様のもものではあり得ない。少なくとも、いくつかの基本的な導出の様式があり、それらが絡み合った上で、言語使用の実際における、複雑・多岐な意味理解が可能になっていると考えるのが妥当である。以下、「schwer」、「leicht」についての様々に解釈される意味が、私たちの概念的認識構造に依存して、重量にかかわる軽重から読み取られるとして、その導出の様式を具体例に基づいて整理してゆく。

3.2.3.1.1. 推論による意味の読み取り

ここでの議論では、「推論」という述語を、推論の様式の細部にはこだわらず、常識による推論を含める(というよりも、それを中心に)広い意味で用いる。重量にかかわる重さについて、常識による推論によれば、重たいものは、動きが鈍い、垂れ下がる、軽い物は、粉であれば、フワフワする、布であれば、薄い、空気であれば、乾燥しているのである。これらの、推論関係のうち、今回調べたデータの説明に必要なものは、形式

的には (38) のリストのように表現されるが、どのような形式的表記をされるにしても、このような推論関係についての知識のまとまりもまた、私たちの常識を構成する要素の一部分なのだと考えられる。もちろん、これらの知識の働きは、常識的な働きであるのだから、様々なコンテキスト要因によって、その有効さが制限、または拡張されたりする柔軟な性質のものである。（「⇒」は広い意味での推論関係）

- 38) ((heavy X) & (move X)) ⇒₁ ((slow move) X) ----- 動作の鈍さ
 (heavy X) ⇒₁ (is_hanging X) ----- 垂れ下がっている
 (heavy X) & (is_[part_of]_body X Y)
 ⇒₁ (feel_weary_in Y X) ----- だるい
 ((light X) & (is_powder X)) ⇒₁ (soft X) ----- フワフワする
 ((light X) & (have_thickness X)) ⇒₁ (thin X) ---- 薄い
 ((light X) & (is_gas X)) ⇒₁ (dry X) ----- 乾いている

この推論によって垂れ下がっていると解釈される「schwer」の例と、薄いと解釈される「leicht」の例を以下に示しておく。一見してわかるように、これらの例は、必ずしも垂れ下がっているとか薄いと解釈されなくても、純粋な重さにかかわる表現と理解されても問題はない。解釈の前件となる重さ、軽さは、意味理解において事実として認識されている。ただ、重さや軽さが皮膚の垂れ下がっている形状だとか、衣服の薄さという現象から把握されるということが、言語表現から自然に読み取られるのである。そのような「読み取り」がないと言語表現の解釈はいきいきとしてこない。

39-s) Die schlaffen Hautsäcke unter ihren jettschwarzen Augen waren so groß und schwer, wie er es noch bei keinem Menschen gesehen.

#0315427

39-l) ... und mit so unvermittelter Kraft brannte die Sonne darein, daß jedermann sich veranlaßt fand, das leichteste Sommerzeug, Musselinkleider und Leimwandhosen ... wieder hervorzusuchen.

#0331613

3.2.3.1.2. 類推による意味の読み取り

形容詞「schwer」と「leicht」の検索した使用例で最も大きな割合を占めていたのは、難易に関係するものであった。

40-s) Sein Alter wäre schwer zu schätzen gewesen, zwischen dreißig und vierzig mußte es wohl liegen ... (#0308209)

40-l) Aber ungeübt ... außerdem wenig geisteskräftig..., war er leicht abzulenken und wurde denn auch sogleich abgelenkt ... (#0318119)

ところで (3.2.2.) で (38) に示したリストには、形容詞「schwer」、「leicht」の意

味理解に関して、重さ、軽さと、運搬における難易との（常識による）推論関係が欠落していた。何かを運ぶのには、それが重ければ難しく、軽ければ簡単であるという推論関係は、形式的には（41）に示されるが、この推論関係を基礎にする意味導出の例は、『魔の山』についての検索では見つからなかった。トーマス・マン・ファイル全体においても、それほど多くは見つからず、（42）は『ファウスト博士』から（「…」による省略は筆者）、また、（43）は『ドンキホーテとともに海を渡る』からの例文である。

- 41) ((heavy X) & (bring X Y)) ⇒₁ (difficult_for (bring X Y) Y)
 ((light X) & (bring X Y)) ⇒₁ (easy_for (bring X Y) Y)
- 42) Mit seinem niemals schweren Gepäck, ... , fuhr er vom Starnberger
 Bahnhof in einem der Personenzüge, ... (#0633933)
- 43) Er weiß wohl, welche edele und menschlich schwere Last er mit
 diesem alle Welt belustigenden Geschichtenbuch auf seinen Schultern
 getragen hat, ... (#0947310)

これらの例の登場頻度の少なさが、文学作品という特殊なデータベースの性質に由来するのか、それとも他の原因に由来するのかわからない。しかし、比喩的な用例ではあるが、（43）に用いられているように、「schwer」、または「leicht」に修飾された名詞句を「tragen」などの運搬を表す動詞の目的語として想定することは、直観的にはごく自然なことである。

本項の冒頭で指摘した、形容詞「schwer」と「leicht」の難易に関係する用法は、テキスト・データベース上の検索結果として重要だというだけでなく、より一般的なドイツ語の知識としても重要である。（40）の例文におけるような困難さを、本論でこれまで行ってきたやり方に従って形式的に表記したのが（44）である（述語「any_do」は、（40）の例文について言えば、「気をそらせる」、「年齢を推測する」などとなる、任意の行為である）。これを更に、推論による意味導出の図式に代入すると、（45）になる。しかし、（45）のような意味導出を支持するような推論は、一般的な常識と相容れない。重たい体重の人と一緒に話しをすることは、軽い体重の人と一緒に話しをすることよりも難しいということはない。話しをすることの難しさは、興味の異なりなどに影響されるのが普通である。

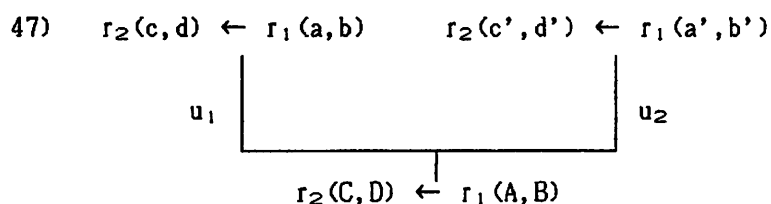
- 44) (difficult_for (any_do Y X) Y)
 (easy_for (any_do Y X) Y)
- 45) ((heavy X) & (any_do Y X)) ⇒₁ (difficult_for (any_do Y X) X)
 ((light X) & (any_do Y)) ⇒₁ (easy_for (any_do X) X)

同様に、年齢が重たいというのも変だが、重たいものが推測しにくいということはない。また、人間が軽ければ、移動させるのは容易かもしれないが、気分をそらせやすいということも常識にはない。私たちの常識にあるのは、これらの関係が似ている、つまり、

類推の関係が成り立つということである (\Rightarrow_A は類推の関係)。

- 46) $((\text{heavy } X) \& (\text{bring } Y \ X)) \Rightarrow_1 (\text{difficult_for } (\text{bring } Y \ X) \ Y)$
 $\Rightarrow_A ((\text{heavy } X) \& (\text{any_do } Y \ X)) \Rightarrow_1 (\text{difficult_for } (\text{any_do } Y \ X) \ X)$
 $((\text{light } X) \& (\text{bring } Y \ X)) \Rightarrow_1 (\text{easy_for } (\text{bring } Y \ X) \ Y)$
 $\Rightarrow_A (((\text{light } X) \& (\text{any_do } Y \ X)) \Rightarrow_1 (\text{easy_for } (\text{any_do } Y \ X) \ Y))$

有川 1990 は、知識情報処理における類推を、システム S_1 から S_2 へのルールのすりかえとして (47) のように定式化している (有川 1990 p.12)。細かい説明はしないが、代入 u_1 によって、 S_1 において使用される関係 r_1 と r_2 にかかわるルールを、 S_2 においては、代入 u_2 によって使用することになり、代入 u_1 と u_2 の類比関係がこの類推関係を裏づけることになる。



ところで、(48) に示す例は、難易にかかわる解釈がなされることが適切な例であるが、(46) に示したような類推の図式から直接に説明することはできない。確かにこれらの例では、何らかの行為についての難易が表現されている。しかしこれらの場合は、その行為の対象の軽重が表現されているのではなく、行為全体の軽重が表現されているからである。しかし、これらの例においても、やはり、類推のプロセスが働き、その結果、行為についての難易の解釈が導き出されるということを以下に説明したい。

- 48-s) Da seine Betrachtungen dumpf und verworren waren, so ist es schwer, sie zu präzisieren. (#0311619)
 48-l) Erst akklimatisiere dich mal, das ist gar nicht so leicht, sollst du sehen. (#0301613)

人間の認知システムは、ただ単に単純明快な情報構造を効率よく扱うことを目指しているのではなく、状況に応じて、剰余的な情報構造を扱い、コミュニケーション・更には人間の生活そのものを豊かにしている。人間の柔軟な認知システムにおいては、行為は、それ自体としてとらえられるばかりではなく、行為Xを実行する行為という関係を明確にした形で焦点を当てられることもできる。(49) のような、認知システムにおける認識のとらえ直しを想定すれば、(47) の類推の図式による、行為についての難易の解釈を説明することが可能である。(49) は別の見方をすれば、一項関係的な認識を二項関係的な(行為の対象を持つ)認識に置き換える働きをしている。

- 49) $(\text{act } X) \leftrightarrow (\text{perform } X \ (\text{act } X))$

50-s) Die schwere Anfechtung, die von der Erscheinung jener ägyptischen Fatme auf Paravant ausgegangen, war längst überwunden, ...

(#0387426)

50-l) So tat er, indem er aus dem Zwecke sachlich kein Mehl machte, ihn aber in persönliches Ehrengelheimnis hüllte und mit leichtem Erfolge sich an den Kavalierssinn des Windbeutel wandte.

(#0397410)

上の (50) の例では、軽重が示されているのは、テキストに明示された何らかの動作の対象でもなければ、動作そのものでもない。しかしこれらの例においても、やはり、難易の解釈が適切である。

私たちの認知システムは、(50-s) の場合には、試練・誘惑のような対象を、打ち勝つの理解の枠組に、(50-l) の場合には、成果という対象は、得るのような理解の枠組に組み入れようとする。(直観的に表現すると、私たちは、「eine Anfechtung, zu überwinden」、「Erfolg zu gewinnen」などの表現をすぐに連想できる。) 意味理解プロセスにおいて、これらの枠組のどれが、どのように働くのかは、慎重に考慮しなくてはならないが、認知システムにおける (51) のような認識対象のとらえ直しを想定すれば、(50-s) について、打ち勝つことの難しい試練、(50-l) について、得ることの容易な成果という解釈を、(44) の類推の図式によって導き出すことができる。

51) (X) ↔ (any_do Y X)

3.2.3.1.3. 意味導出の複合による読み取り

類推による意味導出に推論による意味導出を組み合わせることによって、より広範な「schwer」と「leicht」の解釈の可能性を説明することができる。例えば、(50-s) において類推によって読み取られた、打ち勝つことの難しい試練とは、さらに深読みすれば、強烈な、または執拗な内容の試練である。このような意味の導出は、以下にいくつかの例を示す推論関係を比喩・見立てによる意味の導出に結びつけることで説明できる。

52) (difficult_for (over_come X Y) X) ⇒₁ (strong/persistent Y)
(easy (over_come X Y) X) ⇒₁ (not_strong/not_persistent Y)
(difficult_for (recover X Y) X) ⇒₁ (wrong Y)
(easy (recover X Y) X) ⇒₁ (not_wrong Y)
(difficult_for (get_free X Y) X) ⇒₁ (bound_strong Y)
(easy (get_free X Y) X) ⇒₁ (bound_not_strong Y)
⋮

これらの意味導出の複合により、説明が可能になる意味の読み取りは、病状の善し悪し、拘禁の嚴重さ、歪みのひどさ、罵り・怒りの程度の大小、罪の重さ、遅刻の程度がひどくないこと、等々である。

3.2.3.1.4. 意味の投射・引き継ぎ

言語表現の意味を構成的 (compositional) に理解する、現代言語理論の形式文法的伝統においては、下位の (埋め込まれた) 意味が上位のノードに支配される意味に投射 (継承) されることがあるということが知られている。以下に示すように、「schwer」と「leicht」の意味理解においても、この意味の投射という考え方が必要である。

53-s) ... Streptos ... so dürfen Sie natürlich nicht an das bekannte schwere Krankheitsbild denken. (#0387024)

53-l) Gott und Natur waren ungerecht, sie hatten lieblinge, sie ... bereiteten dem anderen ein leichtes, gemeines Los. (#0395927)

(53-s) では、病気についてのイメージが重いと表現されているが、実際には、病気が重いのであって、病状が悪い。(53-l) では、くじ・運が軽いと表現されているが、実際には、くじ・運によって割り振られた内容が軽く、つまらない。この (53-l) において、意味の投射が考慮されなくてはならないことは、(54) との対比により明確になる。

(54) では 幸運 (Glücksschwebe) が軽いと表現されているが、この軽さは、運によって割り振られた内容の軽さではなく、幸運が気紛れであるという読みをされなければならない。(幸運の割り振りの気紛れ、幸運の内容のつまらなさを軽さからどのように導き出すのかは、次項 3.2.3.2.、さらに、最終章 4. の議論によって間接的に解き明かされる。)

54) ... berückt von dieser phantastisch wechselnden Gunst, die zuweilen, in leichter Glücksschwebe, von allem Anbeginn die Elferpaare ... sich häufen ließ, ... (#0387904)

3.2.3.2. 考察 II-b: 概念的認識構造に依存しない意味の読み取り

これまでに議論した、概念的認識構造に依存した意味の読み取りによって、形容詞「schwer」と「leicht」のある程度の意味の拡がりを説明することができる。しかし、例えば、(55) に示した例を見してみる。

55-s) Sie sollte mit einer schweren Gabe ausgestattet oder geschlagen gewesen sein, die sie in Demut getragen und die darin bestanden hatte, daß Leute, die baldigst sterben sollten, inren Augen als Gerippe erscheinen waren. (#0330527)

55-l) Niemand bestreitet nun freilich, daß Hans Kastorp ... ohne wirkliche Schwierigkeit aus dem Ungewissen sich rechnerisch hätte ins klare setzen können, ebenso, wie das der Leser mit leichter Mühe zu tun vermöchte, ... (#0375128)

(55-s) の例では 才能 (Gabe) が重いと表現されている。しかし、才能を類推によって困難に結びつける認知的枠組は容易には見つからない。恐らく、才能に結びつきやすい

認知的枠組は持っているだろうが、才能を持っていることは常識的にはむしろ容易につながるのである。または、才能を得ることは困難の解釈に結びつくだろうが、この解釈は、テキストの内容とマッチしない（才能を得ることは困難という解釈が別のコンテキストにおいて可能かどうかはよくわからない）。(55-1)では苦勞 (Mühe)が軽いと表現されている。苦勞を常識的にすると結びつけると、類推による解釈では、苦勞をすることが容易であるということになってしまい、意味がわからなくなる。

3.2.3.2.1. 比喩・見立て・イメージによる意味の読み取り

(55-s)では才能が移動の動詞「tragen」の目的語としてテキスト内に再登場している。このテキスト内の示唆により、(47)の図式による類推によって、才能を運ぶのが難しいという解釈は可能である。しかし、この解釈そのものは、何を意味するのか不明であり、以下に説明する比喩・見立て・イメージの拡がりによる意味の導出が必要となる。

日本文化の発想にも「肩の荷が下りる」など、仕事や課題を荷物としてとらえるものがあるが、ドイツ文化にも「Das Leben wird mir zur Last (人生が私にとって重荷となる)」のような発想がある。ものごとを荷物に例え、または荷物と見立てることにより、そのものごとをすることの困難さ、または容易さが表現される。才能が、荷物、または運ばれるものに見立てられる。そして、その背後には、困難さ、または容易さを荷物の軽重に例えるドイツ語を使用する社会の認知的・文化的枠組がある。このような条件のもとに、(55-s)については、才能と共に人生を生きてゆくことが困難であるという解釈が可能になる。

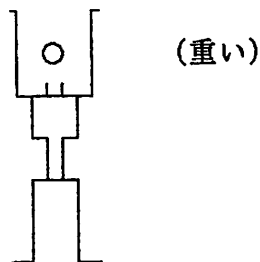
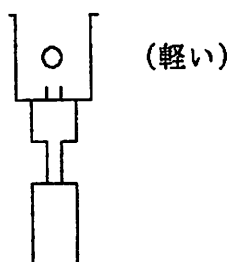
また、(55-1)では、苦勞が荷物に、またはむしろ、単純に重みのある対象に見立てられている。重みのある対象と見立てられた苦勞が軽いと表現されているのである。ここで読み取られる苦勞の軽さとは、苦勞が大きいということである。

比喩・見立てによる意味の読み取りに貢献しているのは、類推におけるような、認知構造間の形式的類似ではなく、むしろイメージ的な要因の働きである。図(56)に示したような画像的イメージの助けにより、才能や苦勞が重量のある対象に見立てられた場合の、それを担いだり持ち上げたりする人間にとっての意味が容易に引き出される。イメージは命題に還元可能であると Pyryshyn 1984 は主張した。しかし、イメージは、意味づけ以前の完全に未分節の画像でもなく、記号・分節的でもない、より柔軟な構造を持っている。だからこそ記号主義的には説明が難しい意味の導出が説明可能になる。また、認知言語学の概念として比喩に新たな光を当てたのは Lakoffと Johnson 1980 であった。ただし、比喩という用語を使うと、言語表現によって、そもそもその言語表現によっては指示されないことがらが捉えられるという、言語による世界の分節化・分節的な側面が強調され、意味理解の構造の柔軟さが隠蔽されてしまう恐れがある。私は、比喩という用語によって、むしろ人間の認知世界の非分節的な柔軟さを示したいのであって、もしそのように理解されないのなら、むしろこの概念は使わない方がよいだろうと思う。

56)

才能/苦勞

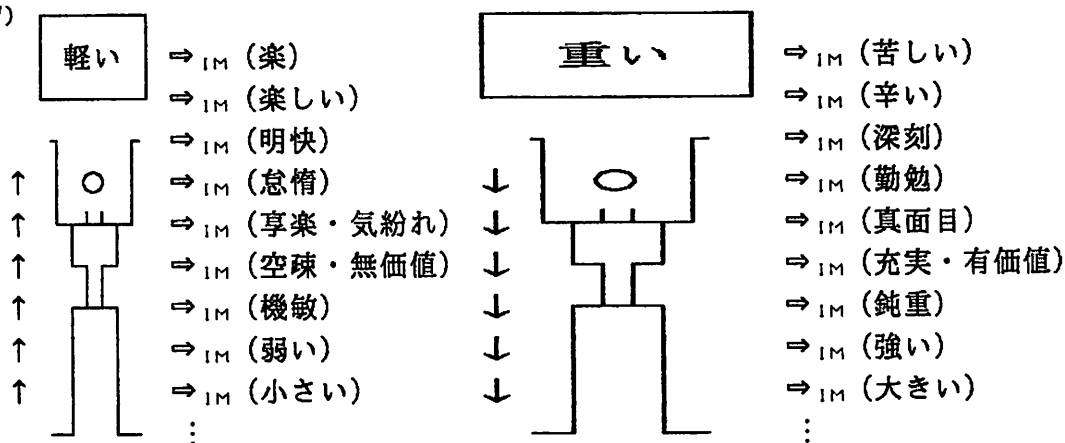
才能/苦勞



3.2.3.2.2 イメージの拡がりによる意味の読み取り

重量をイメージとして捉えるということは、前項で見たような、荷物に見立てられたことからの軽重が大小の概念に結びつけられるにとどまらない。私たちの人間のイメージの力は、歴史的・文化的要因に束縛されているには違いないが、概念の間の柔軟な結びつきを可能にする。図(57)は(56)を更に視覚的、そして概念的手段に訴えて補足したものであるが、このようなイメージの拡がりを経介して、(58)から(61)に挙げるような例文などの解釈が説明可能になる(⇒_{IM}はイメージ連想を表わす)。

57)



58) Schweren Herzens stand er auf, ... (#0368208)

59) ... er hatte am liebsten immer nur schwere Havannas geraucht. (#0335413)

60) Das Summen der Insekten ..., der Sonnenschein selbst, der leichte Wind, das Schwanken der Wipfel ... (#0389735)

61) Später begab er sich ... auf seinen Balkon ... , während leichte Musik von näher oder fernher ... heraufklang. (#0328311)

心臓の重さは気持ちの暗さや深刻さ (58)、葉巻の重さは味の濃さ (充実) や強さ (59)、風の軽さはその吹き方の弱さや快適さ (60)、音楽の軽さはその明るさや享楽

的な内容 (61) を表現している。これらの意味の読み取りは、(57) に示したような、重さや軽さについて私たちが持っているイメージの拡がりによるところが大きい。さらに、刺戟や衝撃の強・弱、不安・楽天、音の低く響く様子、行為や変化の程度の少なさ、などの読みがこのような仕方で説明できるだろう。

4. 結論と今後の展望

4.1. 研究成果のまとめ

今回の研究では、言語表現の具体的な使用における意味の揺れは、言語表現の言語固有意味と、人間の知識システムのインタラクションによって説明されるという仮説を、テキスト・データベースから集めた資料を分析することによって裏づけよう、という作業を行った。時間・労力の制約があって、予定していたほどの言語事例にあたることはできなかったが、言語表現の言語固有意味と人間の知識システムのインタラクションを実際に記述し、そして、言語表現の言語固有意味に迫るという当初の目標に向かって、僅かではあるが、研究の足跡をのこすことができた。

考察 I-a (3.3.3.1.) で示したように、言語表現の意味の拡がりには、言語固有意味としての意味の核心と人間の知識システムが相互的に働く、実際の知識プロセッシングの出力として理解できる。考察 I-b (3.3.3.2.) に示したように、実際の意味解釈を決定する上では、言語表現の統語的枠組よりも、知識システム・知識のネットワークの働きがより決定的であることもある。つまり、言語理解のプロセスにおいて、知識システムは非常に大きな働きをしているのである。考察 II-a (3.2.3.1.) では、言語固有意味と人間の知識システムが相互的に働く、実際の知識プロセッシングにおいては、一方では概念的認識構造の枠組に依存した処理がなされているのだろうということを議論した。さらに、考察 II-b (3.2.3.2.) においては、概念的知識の枠組をこえて、イメージなどの概念的認識構造によらない処理を想定しなければ、そのような知識プロセッシングを説明することができないという議論をした。

全体として、言語表現の意味理解プロセスが、人間の知識システムにおける情報処理であり、そこでは、人間の知識が大きな役割を果たしている。しかし、それにもかかわらず、言語表現には、言語表現に固有の意味の核心が備わっているのであって、その骨組みが、言語表現についての意味理解にやはり大切な働きをなしているのである。以上のような、自然言語固有の意味と知識システムのインタラクションという観点から、人間の言語理解を解き明かそうとしたのが、今回の研究の試みであった。

この研究において示したのは、自然言語固有の意味についての問題と知識システムについての問題を分けてとらえ、そして、その双方のインタラクションとしての言語理解をとらえるという考え方であった。このような問題の整理が適切であるならば、私たちは、少なくとも、これまでの言語と意味の問題につきまっていた曖昧さから逃れることができる。「言語の意味」といいながら、絶えず対象について、または対象についての私たちの知識に言及せざるを得なかった、言語学の意味論の守備範囲を、ようやく

「言語固有の意味」に特定することができるのである。この方向で言語研究者それぞれの考え方が整理されるならば、言語の理論的研究ばかりではなく、実際的な領域（辞書作製・言語教育など）においても多くの無駄な議論が避けられるはずである。つまり、言語の意味や使用の問題を扱うのに必要以上に対象についての知識の問題を取りこんではないし、また必要以上に軽視してもいけないのである。（そのような混乱が常に生じていること、そして何故そのような混乱が生じやすいのかは、言語の意味の扱いにかかわる基本的な問題として、この報告書、第一章においても、またそこに引用した幾つかの論考において、すでに論じた。）

今日の科学技術の進展との関係でより関心を持たれるかもしれない問題として、自動翻訳システムや自然言語による自動応答システムなど、計算機による実際の自然言語理解システムの実現に貢献できるかどうか、ということがある。このことについて、個々の事象を適切に記述するのに四苦八苦している言語研究者としては、それほど楽観的な物のいい方はできないと思う。しかし、いずれにしても、メカニズムとしての人間の言語理解を解明し、実用につなげてゆこうと考えるならば、私の提案を含めて、なんらかの形で、言語固有の意味と知識システムの問題を整理した上で、具体的な記述の試みをさらに着実に積み上げてゆくことが、「まともな」アプローチであると私は考える。

4.2. 解き明かされないもの

以上の議論で、理屈としては、かなり幅の広い・明快な議論をすることができた、と思う。しかし、ここに積み上げた議論によって、言語表現の意味の本質的な部分がやはり取り残されてしまうということを指摘せざるをえない。しかし、そのことによって、この研究プロジェクトの成果を否定されてしまうということではない。このような方向で議論を進め、体系だった理論構成がまとまりを見せるほどに、恐らく人間が意識をもつということ始めて以来ずっと私たちを悩ませてきた「言語と、私たちの知性の働き」という謎は、いつもこの手のうっちゃりをみせるのである。

思わせぶりはよして、なにが解き明かされずに残るのかという議論に入ろう（ここでの議論は竹内（1993b）の議論と一部重複する）。

4.2.1. 意味理解の監督者としての認知システム上の私

今回の研究プロジェクトで追求した課題は、表現の意味理解の可能性の拡がりを、認知システムと言語固有の意味とのインタラクションによって説明することである。この議論を、逆の方向からみると、しかし、大きな落とし穴がある。意味理解の可能性の拡がりがインタラクションのメカニズムによって説明できたとして、その可能性からの絞り込み・選択はどのように説明できるのだろうか。例えば、(53-1)と(54)で観察された、運命の軽さが、運命の割り振り方についての軽さなのか、割り振られた運命の軽さなのかは、どのように決められるのだろうか。

上に見た例においては、テキストが伝えられている内容全体との関連によって、曖昧さ

が除去される。コミュニケーションとしてのテキスト理解・私たちの知識とのすり合わせを認知システム上の主体としての私が行っているのである。意味理解の整合性を全体としてモニターする私に触れることなしに上の問いを解くことはできない。しかし、私とはいったい何かということは、やはり永遠の謎なのではないだろうか。

4.2.2. プロセスの競合

多くの場合、概念的認知構造に依存した意味の読み取りと、比喩・見立て・イメージの拡がりによる意味の読み取りによる意味の読み取りのどちらの機構が働いて、実際の言語理解が成立しているのかは区別が難しい。例えば 3.2.3.1.2. の (50-s) について、類推によって誘惑に対する打ち勝ち難さが読み取られ、さらに意味導出の複合によって誘惑の強烈さ・執拗さが読み取られることを議論した。しかし、これらの意味が、比喩・見立て・イメージの拡がりに依存して読み取られるとも考えることも可能である。むしろ、神経回路網の研究など、大脳の動作を並列分散処理としてとらえる見方からすれば、これらのプロセスが同時に平行処理的に働いていると考えるのが妥当なのだろう。

しかし、チョムスキーの一連の仕事に負うところが大きい、言語研究に対する問題意識を踏まえるならば、意味の読み取りの問題を、概念的認知構造に依存するのではなく、ましてや、比喩・見立て・イメージの拡がりなどに依存するのではさらさらなく、統語構造を基本にすえた言語の仕掛けとして追求することには、意味があるのだろうか。この問いは、大脳の並列分散処理を想定して考察をすすめる限り、相対的な性質のものであるだろう。いずれにしても、記号主義的な言語の仕掛けが働く局面というものが、言語にはつきまとうのである。しかし、それがどこまで人間の認知に本質的な関与をなすのかということは、私にはまだよくわからない。もしかしたら、記号主義的な言語観というのは、言語が言語研究者におしつける幻想（妄想）のようなものかもしれない、と思いたくなったりもするのである。

4.2.3. 認知型と言語の基本問題

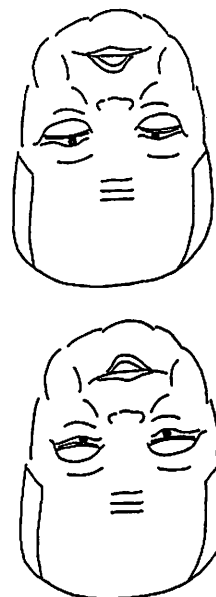
この研究では、基本的に、意味の読みを、人間の認知システムの情報処理的な働きとして理解しようという議論を行った。しかし、このような議論を後期のヴァイトゲンシュタインが聴けば怒りだすのではないかと思う。彼によれば、意味は分解したり、組み立てられたりするものではないのである。私は彼の怒りを真剣に受け止めたいと思う。

人工知能の議論でフレーム問題が取りざたされることから分かるように、本論で提示した情報処理、特に第二章で議論した概念構造に依存した処理を、記号処理として計算機にかけようとするれば、計算量の爆発が問題になる。この問題が計算量の爆発の問題として、上に提起した問題と本質的にからみあうのかは疑問も残るが、私たちが絶えず、意味の読み取りを記号演算的にしているのかということそうではない。だから、第三章に議論したように、概念構造に依存した処理では説明できない意味の拡がりが、自然言語表現にはつきまとうているのである。

意味の読み取りがイメージの拡がりに依存することもある、という私の議論が正しいとする。その場合、情報の処理対象としてのイメージの性格から、意味の読み取りにおいて働いているのは、非記号演算的な情報処理に違いなく、それは恐らく、神経回路網的な情報処理なのであろう。

人間の画像処理においては、認知の枠組が大きな役割を果している。図(62)は、Thompson(1980)の「サッチャー錯視」として知られているものの、日本ヴァージョンである。この図は、適切な認知の枠組としての、直立の人間の顔の輪郭がなければ、目や唇の表情は読み取ることができないことを示している。言語理解の機構においても、このような認知の型・枠組が、様々な情報の複雑な結びつきとして神経回路網のパターンを形成していると仮定することは根拠のないことではない。Lakoff 1987(534-538ページ)は、文法的な機構の組み合わせによって、より複雑な文法を構成することが可能であるとしても、その文法を使いこなすためには、その組み合わせについて学んでいる必要がある、またそのような文法はゲシュタルト的であるだろうと指摘している。つまり、部分部分の組み合わせとして説明すべきではないと主張しているのである。

62)



(福村 1992、p. 449)

言語理解は、少なくとも、何らかのイメージの拡がりすら扱いうる非記号的な情報処理と、記号的・概念依存的な情報処理の、それぞれのプロセスの組み合わせ以上の何らかの全体的複合である。その点にこそ、私たち人間の知的生活を可能にする、強力な情報処理能力は由来していると考えることができる。そして、繰り返しになるが、その点についての不明さが、今回の研究プロジェクトのような方向で議論を進めれば進めるほど、明らかになってくるのである。

4.3. 今後の展望

前項で述べたように、言語の意味の問題についての解き明かされないことがらが存在し、それがどのような性格のものであるのかということが僅かながらでも明らかになってくるといって自体は、決して悪いことではない。むしろそれが研究という営みに内在する弁証法とでもいったことなのであるのだろう。この問題とのかかわりで、以下簡単に二つの点について、言語の意味をめぐる研究がどのような方向で、どのような作業をすすめることができるのか(私自身にとって、またはより一般的に)ということを書き、この報告を締めくくりたい。

言語の意味の問題についての解き明かされないことがらについては、人間にとっての永遠の課題ということを書いた。これは、だから、そのままにしておけばいい、という主

旨ではない。だからこそ、私たち研究者は。喜びをもってこの課題に取り組むべきなのだろう。幸い、すでに繰り返し述べたように、今日の言語、および、人間の認知をめぐる諸科学においては、形式的・記号主義的・デジタル指向的な議論と非形式的・全体論的・アナログ指向的な議論とが、大きな視点で見れば、互いの緊張関係を保ち続けてきた。この緊張関係・およびその緊張の止揚としての科学の展開という点で、今日の私たちの科学を巡る状況が、様々な領域における成果を踏まえた諸提案が入り乱れ、依然として流動的な局面にあることを、私たち研究者はまた自らの喜びとすべきなのだろうと思う。

現代の言語研究の世界で様々に提案されている、GB理論・形式意味論・AI研究・認知言語学・コネクショニズム・平行処理・非形式文法・・・などの諸理論は、おそらくそれぞれに言語の本質的な部分に迫りながら、その正当性についての拮抗を続けるだろう。また、更に次々に、新しい提案がなされるだろうし、忘れ去られる提案も多いことだろう。そのようなダイナミックな研究史の流れにおいて、私たち研究者は自覚的に自分の位置を見定め、歩みを進める努力を重ねなければいけないのだろう。私自身にとっては、今回の結論を踏まえる限り、言語の形式的な側面・非形式的な側面を見据えた理論形成の可能性を摸索していくことが課題となると思っている。

さらに、そのような、理論形成の摸索を続ける上で、言語資料の具体的な記述作業を確実に積み上げてゆくことを忘れる訳にはいかない。今回の研究は、テキスト・データベースを用いた、具体的な言語表現の意味記述の作業についての一つの提案でもあった。この方法そのもの、および、有効性についての批判、そして、改良にむけての提案をぜひお聞かせいただきたいと思う。また賛同がいただけるならば、このような方向での具体的な作業の積み重ねを多くの方々とともに、進めていきたいと考えている。

文献:

- 甘利俊一 1989: 神経回路網モデルとコネクショニズム、東京大学出版会
- 有川節夫 1990: 類推を用いる知識情報処理システムの開発、平成元年度文部省科学研究費補助金(試験研究(2))研究成果報告書
- Dowty, D. et.al.1981: Introduction to Montague Semantics. Reidel
- Fauconnier, G. (1985) : Mental spaces of meaning construction in natural languages. Cambridge, Mass., The MIT Press
- 樋口忠治、篠原武(1987): テキスト・データベース「トーマス・マン・ファイル」の完成と再編成について。九州大学大型計算機センター広報 vol.20, No.6, pp 582-596
- 福村晃夫 1992: AI辺縁における諸問題、人工知能学会誌、vol.7 444-451
- Jackendoff, R. (1990) : Semantic Structures. Cambridge, Mass., The MIT Press
- Johnson-Laird, P.N. 1983: Mental Models, Cambridge Univ. Press
- Katz, J.J. & Postal, P.M. 1991: Realism vs Conceptualism. in: Linguistics and Philosophy, vol. 14, No.5, pp. 515 - 554
- Kiss, G.R.1973: An Associative Thesaurus of English and its Structure. Medical Research Council Report, April(mimeographed)
- Lesser, Ruth 1989: Linguistic investigations of aphasia. 2nd ed. Cole and Whurr, London
- Lakoff,G and Johnson,M. 1980: Metaphors We Live By. The University of Chicago. (「レトリックと人生」、大修館書店 1986)
- Lakoff,G 1987: Woman, Fire and Dangerous Things, What Categories Reveal about the Mind. The University of Chicago Press. Chicago
- Montague, R. 1974: The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English. In: Thomason (Ed.) Formal Philosophy, selected Papers of Richard Montague. Yale Univ. Press
- 野本和幸 1988: 現代の論理的意味論、フレーゲからクリプキまで。岩波書店
- Pribram, K.H.1971: Languages of the Brain: Experimental Paradox & Principles in Neuro-Psychology, Prentice-Hall
- Pyrshyn, Z.W. 1984: Computation and Cognition, Toward a Foundation for Cognitive Science, The MIT Press (「認知科学の計算理論」、産業図書 1988)
- Quine, W.O. 1964: From a Logical Point of View, Cambridge/Mass.
- Rumelhart,D. E. & McClelland, J.L. and the PDP Research Group1986: Parallel Distributed Processing, Explorations in the Microstructure of Cognition. The MIT Press
- 白井賢一郎 1985: 形式意味論入門、言語・論理・認知の世界。産業図書
- 菅野道夫 1989: ファジイ理論の展開、科学における主観性の回復。サイエンス社
- 竹内義晴 1990a: 言語固有の意味領域の確定のための考察。言語科学25号、pp 68-97、九州大学言語文化学部言語研究会
- 1990b: 言語・文化論序説 — ことばと文化の関係を整理する、第一部、言語文化論の危うさについて。言語文化論究 1号、pp 67-70、九州大学言語文化部

- 1991a: 自然言語の意味論の基本問題: 世界についての知識と自然言語固有の意味との関係について。言語科学26号、pp 35-62、九州大学言語文化部言語研究会
- 1991b: 言語・文化論序説 — ことばと文化の関係を整理する、第二部、ことばの意味をどう考えるか。言語文化論究 2号、pp 63-84、九州大学言語文化部
- 1992a: 言語・文化論序説 — ことばと文化の関係を整理する、第三部、ことばと文化の復権に向けて。言語文化論究 3号、pp 37-54、九州大学言語文化部
- 1992b: テキスト・データベースから採取した言語表現資料に基づいてリレーショナル・データベース・ソフトウェアを利用して言語記述作業を行なうためのマニュアル的ノート。言語科学27号、pp 36-55、九州大学言語文化部言語研究会
- 1992c: 意味解釈に対する統語関係の未決定性と、意味理解・知識処理における言語表現の意味関係の役割について — テキスト・データベースによるドイツ語の形容詞「empfindlich」の記述から。ドイツ文学論集25号、pp 78-81、日本独文学会中国四国支部
- 1992d: 表現対象（モデル）の意味論からことばの意味論へ、言語と知識の平行理論に向けて。西日本ドイツ文学 4号、pp 1-12、日本独文学会西日本支部
- 1993a: 自然言語における言語固有の意味の追求 — テキスト・データベースによって検索したドイツ語の形容詞「empfindlich」の使用例についての意味の揺れの記述から、金沢大学文学部紀要、文学科篇（印刷中）
- 1993b: 言語表現の意味理解と認知システム — ドイツ語の形容詞「schwer」と「leicht」の解釈における推論、類推、比喩・見立て・イメージの拡がり、認知型の働き（準備中）
- 田中茂範 1990: 認知意味論、英語動詞の多義の構造、三友社
- 土屋俊 1990: 言語学は認知革命を生き延びるか。月刊言語 Vol. 19、No. 1、72-77ページ
- 1992: 言語学のあり方を問う（1）、松村一登氏への質問状。月刊言語 Vol. 21、No. 10、13-17ページ
- Wittgenstein, L. 1945: Philosophische Untersuchungen. In: Schriften 1. Suhrkamp
- 山田進 1973: アガルとノボル。柴田武編、「ことばの意味、I、辞書に書いてないこと」pp 14-23。平凡社
- 山鳥重 1985: 神経心理学入門、医学書院